

## 明治スタンダードと言文一致 (2)

——言文一致を中心に——

野村 剛 史

### 1. 明治期初年期の口語体

日本の明治初年期の大ベストセラーと言え、福沢諭吉『学問のすゝめ』(一篇～一七篇)と中村正直『西国立志篇』であろう。両者は、比較的平易とはいえ、文語体(非言文一致体)の文章であり、この時代の印刷物の文章の多くは文語体であったことは間違いない。しかし一方、この時代に相当量の口語体の印刷物が流布していたことは、忘れられがちである。言文一致体となると、とかく時代は明治20年前後、個人名としては二葉亭四迷・山田美妙の二人が挙げられるが、それは多分に、明治期後半以降に作られた草創神話のおもむきが認められるのである。

さすがに、この草創に加担した坪内逍遙(1859・安政6生)は次のように述べて、明治初期の口語体を忘れてはいない。

いろいろな意味で明治第一期の文化の先端を代表してゐた雑誌は『明六雑誌』であつたといつていい。其中でも文体の事で極左的であつたのは、其第一号で「洋字を以て国語を書くの論」を發表した西周である。彼れは明治七年に『百一新論』といふを出版してゐるが、それは全部が平田篤胤式のゴザル、ゴザラウ式の口語体で、例の円朝物の筆記以外に於ける最先の言文一致であつたらうと思ふ。同十五年ごろに出版になつた中江兆民の『民約訳解』が全部漢文訳であつたのに比べて、如何に西が文体上に於て急進であつたか、想はれるではないか？

が、外国の小説を言文一致でと主張もし試みても見ようとして、其第一稿を私に初めて見せた男は二葉亭であつた。それは明治十九年三月十七日の事である。

(坪内逍遙『柿の蒂』「口語体の創始」1933)<sup>1)</sup>

しかし、確かに忘れてはいないが、逍遙の記述は明治7年から明治10年代後半に跳んでいる。明治12年に満20才に達した逍遙(前年に上京、開成学校入学)にとって、明治初年の口語体の状況はどの程度にリアルタイムであつたのであろうか。

明治初年期の口語体の印刷物は、大きく二つに分類できるように思われる。一つは、西周『百一新論』などをトップランナーとする開化啓蒙ものとも称すべきグループである。もう一つは、

明治7年の「読売新聞」創刊に始まる小新聞談話体である。まず、開化啓蒙ものの文章を簡単に眺めてみよう。

左用でござる。其れに付ては西洋の事を序でに御話申すでござらう。西洋の古へ希臘の時も矢張周人の如く教といふ考へと法といふ考へは混合して居たことと見えるでござつて、…此人が始めて教と法と其本源を異にすることを發明致してござる。故に今を去る七十年前位なことで、誠に新しいことでござるが、併し是れは教と法との理論上のことで、……

(『百一新論』前稿参照)

この種の開化啓蒙ものは、遠く室町期以来の抄物の伝統を引き継いで講義体を装うことが多く、また一層の親しみやすさを求めるためか、問答のスタイルを借りることもある。講義は、いわば話し言葉と書き言葉の中間の言語態様を持つが故に、講義体は書き言葉口語体の一つのスタイルを形成することが可能だったわけである。文末形式としては、ゴザル、ゴザリマス、マスの使用が目立つ(前稿参照)。

明治10年代になって自由民権運動が盛んになると、民権啓蒙ものが開化啓蒙ものの系譜を引き継いだ。著名なものとして、植木枝盛『民権自由論』がある。

世の諺にも不知<sup>しらぬ</sup>是天福<sup>てんぷく</sup>と申す通りで、成程世の事国の事も自身は識らざる時は更に心に掛らずして一向心配することはありませんまい。だが右の如く人間が箇様に世間の物事を識らずして済むものでありましよう歟……………寧<sup>いづ</sup>そ死んでしまつて早く棺の蓋をしてもろうが宜しひ。是れはなんと馬鹿の至りではござらぬか。

(『民権自由論』12年)

出版の自由権とは己れが文章著書杯を自由に発行するを云ひ、是もまた思想と自ら本末を相為すものでござりますが、……………民たる者は必ず出版の権なくては決して決してなりません。

(『民権自由論』二編甲号 15年)

また、自由民権運動などに伴う各種の演説が筆記印刷されている。この種の口語体は、その基盤において抄物以降の「講義」が「演説」に代わったようなものであって、必ずしも演説速記に基づくものばかりではない。やや後れるが、地方で出版されたものの一例を示す。

東洋文明の先駆を為し列国が誘導する者は豈夫れ日本帝国なる乎との語がござりますが私が此書を見ましたる時之れは少しく我国を称揚しすぎた言葉でないかと思ひましたが今日となり此語の我を欺かざるを知ました……然し憲法の発布が何故如斯賀す可く祝す可く喜ぶ可くござりましよう。憲法の功德何でござりましようか

(22年 原猪作君演説 讃岐国那珂郡琴平町著方儀三郎筆記発行)

もう一つの大きな流れとして、「読売新聞」(7年11月創刊)に始まる小新聞の記事にも、口語

体が採用されている。話し言葉調の性格が特に意識されて（以下の「読売」の「稟告」中には「談話」とルビがある）、「小新聞談話体」などと称せられることが多い。例文の原文は総ルビである。

千里軒の馬車のために原田清吉の娘のおとくは曳殺されて漸く此ほど公裁が済か済まないのにまた浅草諏訪町の安達と云人の息子が八月二十五日に曳殺されました此子はまだ四歳だそうで御座いますが何といふ不行届駈者さんたちだか聞て気の毒な事でございます

（「読売新聞」一号）

木挽町の高島徳右衛門の家で此ほど玉つき其外の遊びをして高貴の方々も集まれ昨日も催しがあつて幹事は海軍の澤太郎左右衛門君がいたされ三条公はじめ其ほか大勢出られましたたが是は勝負ごと杯では無くただ交際を広くする為であります。

伊達政宗欧南遣使考といふ本は元和年間に支倉六右衛門をホルトガルへ遣った事を書たもので正院の翻訳課でおしらべになり近々に発売になるといふ

（以上「読売」10年一月四日）

「読売」の「稟告」には、

此新ぶん紙は女童のおしへにとて為になる事柄を誰にでも分るやうに書てだす旨趣でございますから耳近い有益ことは文を談話のやうに認て御名まへ所がきをしるし投書を偏に願ひます

（一号～一九号）

とあつて、口語体採用の趣旨が分かる。文末形式にはマス、デアリマスなどが多用されており、ゴザリマスもよく見かけられるが、ゴザルは勿論、このゴザリマスも開化啓蒙ものに比べて少なく、その点で文体に変化が認められる。

以上のような小新聞口語体は、山田美妙・二葉亭四迷を「近代口語体」の二枚看板とする通念によって、今日に至るまで不当に軽視されて来たように思われる。例えば、明治10年前後の「読売」のどれを選んでもよいが、その紙面の「新聞」（ニュース）欄には、以上に示したような口語体が氾濫している。一面すべてが口語体で埋め尽くされていることも珍しくないのである。しかもその発行部数は大新聞を凌駕して、創刊翌年の明治8年には一万部に達していたという（『読売新聞百年史』1976）。しかも新聞回読所のような存在を別にしても、新聞は購入者一人が読者ではないことが通常であるから、その波及力は少なく見積もっても部数の数倍にも達するだろう。その上、毎日毎日発行されつづける訳である。なるほど、小新聞はその記事も教訓もいかにも通俗的、場合によっては前近代的ではあろう。しかし、口語体という文体には、本来「近代」も「前近代」もありはしない。言文一致というとか何かにつけて「美妙・二葉亭」が持ち出され、その事自体は興味深くあるけれど、ややもすればそれは、言語史についての「文学」中心史観に陥っているもののようにも思われる。

以上の二潮流以外の口語体としては、洋学書、小学教科書などが目に付くが、例えば洋学書としての『ものわり の はしご』（清水卯三郎 7年）やキリスト教の教えの書『天路歷程意訳』

(「七一雑報」10年～11年)などは、開化啓蒙ものの系譜の中に入れてよいように思われ、一方小学教科書などは文章量も少なく、しかも未だその波及は、「子ども」という小範囲に留まると言える。

さて、上記のような明治初年の口語体文章は、次のような特徴を共有しているようである。

第一に、その内容面における啓蒙的・教誨的色彩の濃さである。この「教諭論」という性格は、江戸期講義体(心学道話や平田篤胤大意もの)以来、この種の「口語体」の一貫した特徴である。小新聞、小学教科書、すべて「啓蒙的」なのである。詳しく見れば、この「啓蒙のこころ」の内部には、個々人に「一身の独立」を求める「平談俗語」の精神が認められるのか、民衆を「女童」に仮託されるような一段低い存在とする導蒙の高みが想定されるのか、特に小新聞には俗情に媚びる商業主義があるとするべきか、種々議論の余地はある。恐らくここには、すべてが未分化のまま混沌としているのであろう。

第二に、読者に対して「語りかける」というスタイルである。語りかけるというスタイルは、講義体の継承者として当然とも言えるのであるが、逆に「語りかけたい、語りかけねばならぬ、語りかけてやろう」という望みが、講義体というスタイルを見出したとも言える。この時期の口語体が「談話体」と称されるのも、一つにはこの「語りかける」という性格に由来しよう。

第三に、文章の多くに、ゴザル、マス、ゴザリマスといういわゆる敬体が選択されている。敬意の度合いは様々であっても、「語りかける」対象が常に意識されることによって、いわゆる「聞き手尊敬」に当たる敬体というスタイルが選択されているのである。それとともに、この種の文章はいわば活字を媒体とするパブリックな文章であることも、「上品な」敬体選択の要因となっている。つまりパブリックに「語りかける」という性格が、敬体選択の条件なのである。

第四に、これらの口語体は、口語体であるからには話し言葉(主としてその文法)に基礎をおいているのであるが、その話し言葉は当時のスタンダードの日本語である。前稿に述べたように、東京山の手教養層の言語がその後の「標準語」を形成したというストーリーは、本末転倒している。明治初年期には、「東京山の手教養層の言語」が明瞭に存在しているなどということはない。にも関わらず、これらの口語体の書き手たちは上方を含め、一貫して同じ様な文法に従って文章を書き記す。しかも、それが全国どこにでも通用すると思こんでいるようなのである。

第五に、すべてに渡って東京がその発信源となっている。かつて、恐らく江戸初期までは、すべての文化の発信源は上方に集中していた。江戸期にはそれが大いに多様化した。ところが開化期には、その発信源が極端なまでに東京に、取り分けその狭い一角に集中を遂げた。ところが、発信者の多くは地方出身者でもあるのであるから、東京語が気楽に駆使できるわけではない。しかしながら発信者は、当然の事ながら教養層に属している。教養層は、全国的にスタンダードに馴染みがあるのである。ここに転倒が生じる。彼ら発信者は、(たとえ上方に居住していても)東京という発信源に属し、彼らの仲間も又そうである。ならば、彼らの言語は東京語ではないか。そしてもともと江戸にいた旧幕臣なども、彼らの言語を江戸弁とまでは言えないにせよ、東京語であるとは認めてくれよう。その東京語はスタンダードとして全国に通用するのであるから、それで「行ける」わけである。

第六に、明治20年頃の「言文一致論」時代と異なって、この時期の口語体の書記は、総じて自然発生的である。明治初期の「国語改革論」は、おおむね「国字改良論」、すなわち「漢字廃

止・制限論」であり「仮名国字論、洋字国字論」である。強力な「言文一致論」に従ってこれらの口語体が選ばれていたわけではない。

以上のような特徴を持った明治初期の書き言葉口語体は、特にその第一の性格によってであろう、明治10年代には急速に停滞の時期を迎える<sup>2)</sup>。

## 2. 言文一致体の低迷と新たな言文一致運動・理論

明治10年代の言文一致体の低迷と20年前後の第2発展期を概観する前に、「話し言葉・書き言葉」「口語体・文語体」の相違点を、その難易という観点から整理しておく。以下に述べることは、極めて平易・当然の事柄ばかりであるが、言文一致についての議論の多くに、この点に関わる混乱が生じているので、改めて確認をする必要があるように思われるのである。

第一に、識字の問題を捨象しても、一般に「書く」ことの方が「話す」ことよりも難しい。前稿で既に、「書き言葉」の「話し言葉」に対しての「自然」として、極めて荒っぽくではあるが、①内容が整理され文体が洗練される、②対・聞き手の要素が相当に脱落する、③品位が保たれる、と述べた。これは、言語の側から見れば書き言葉の自然なのであるが、言語主体の側から見れば意志的な当為である。特に①を実行することは、相応に難しい課題となる。この意味で、「話すとおりに書くことは出来ない」という指摘は、真実であろう。しかしこの点から、「言文一致はあり得ない」(明治期のやや洗練された言文不一致論者は、このような言い方をしていた)のような結論を導くことにはトリヴィアルな意味しかない。言文一致とは「口語体で書く」ことであって、実質的には文字通りの「話すとおりに書くこと」ではないからである(明治期の洗練された言文一致論者は、このことを理解していた)。

第二。一般に(ここでは特に初等教育修了程度までを想定してみる)、文語体で書くことの方が口語体で書くことよりも、難しい。文語体で書くには、口語体で書くことに対して、更に文語体固有のルール(文法やときに語彙選択にも波及する)を習得しなければならない。だから文語体は口語体よりも難しいのだが、「話すとおりに書くことは出来ない」と主張する論者は大抵、第一の論点(書く事の難しさ)と第二の論点(文語体の難しさ)を未分化に放置して、口語体の易しさに目を向けようとしない。その結果、「口語体でも文語体でも書くことは難しい」のような結論を暗黙に導いてしまう。例えば口語体による綴り方などで、「話すとおりに書く」という指導は、それほど間違っていない。第一の論点は言語の自然なので、易しいとは言えないまでも、人々はこれを「自然に」クリアしようとはする。つまり「書くこと」一般の難しさを克服できれば、口語体は易しいのである。そしてこの「易しさ」は、当然一種の実用性の高さにも通じる。

第三。明治中期という時点では、やや知的に高度な文章(中等教育修了程度までくらいを想定)を書く際には、文語体の方が口語体よりも易しい。その理由は、文語体の形式での文章見本は伝統的に蓄積されているが、口語体での文章見本は未だ十分蓄積されていない点に求められる。例えば「花を見るの記」の類の普通文(当時広く通用していた文語体)の見本は、豊富なバリエーションを伴って、教科書・雑誌・新聞等にいくらかも見出すことが可能である。口語体の文章では、そうは行かない。文章というのは、内容・文体を含めて丸々が見本なのだから、それが乏し

い状況では、はなから筆がこわばってしまう。明治中期の口語体に翻訳文が多いのも、一つには内容上の興味にもよるだろうが、翻訳は内容を創造しなくてよいので、「書く」負担は大いに軽減されるという要因を考慮しておかなければならない。例えば二葉亭四迷の場合であれば、端的に言って、翻訳文『あひゞき』を書く方が創作文『浮雲』を書くよりも遙かに易しいのである。

第四。これは第三論点の系のようなもので、文章の難易度に直接には関わらない事柄であるが、文語体と口語体の選択には趣味・好尚が関与する。明治中期には、口語体よりも文語体を趣味として好む教養人が多かった。これには、第二点の意味で文語体を「高級」とする感覚（「難しいものは高級である」）が絡み、しかも第三点の理由によって、この時期の口語体の文章にはしばしば洗練が欠けている。そればかりではない。明治中期には欧化傾向<sup>3)</sup>と国粹傾向の対立が生じている。もともと文語体も口語体も日本語なのだから、欧化傾向にも国粹傾向にも直接には連動しないのだが、欧化傾向の者が「欧州では言文一致なり」と言い始めると、国粹傾向の者はそれに対する反撥から、文語体擁護のために詰まらぬ理屈で切り返す。この時期の言文一致論が混沌としてしまうのは、しばしば趣味に理屈を付けるためでもある。以上、第一から第四までの論点を、議論の混乱を避けるために挙げておいた。

さて、明治初年期のいわゆる「国語改良論」は、すでに述べたように「文字論」を中心としていた。その第一は、「漢字廃止」ないしは「制限」の論である。前島密『漢字御廃止之議』が著名であろう。第二は、主に「漢字廃止」に伴う「かな文字論」「ローマ字国字論」である。「仮名遣い論」は、まだ表面化しない。

一方この初年期には、理屈としての言文一致論は全く無いでもなかったが、多くの言文一致体実践は、明瞭な主張に基づくものではない。明治初年期の口語体は、「言文一致論」無き「言文一致」、すなわち自然発生的とも言う「言文一致」であった。その自然発生的性の基盤に何が求められるかと言えば、それは先の「開化啓蒙」の精神であろう。開化啓蒙体の著者等はあたかも教師の如き存在であり、読者はあたかも小児の如き生徒達だったのである。これが口語体の「易しさ」に関連することも、明らかであろう。

この種の「教師一生徒」関係は、小新聞にも波及して、大量の書き言葉口語体を生み出したわけだが、同時に一定の期間経過後の口語体文章の停滞をもたらしたとも言う。まず読み手の側からこれを見れば、いつまでも続く小児扱いは嬉しいものではあるまい。ある時子供が「子供向きのお話」の類を顧みなくなるように、彼ら読み手も又、「高級化」を求め始めるのである。次に書き手の側からこれを見れば、彼らも又「高級化」への願望が強いはずである。その上、民権運動を別にすれば、「開化」の種もいずれは尽きる。

このように、明治10年代における口語体文章の停滞の原因として、本稿は、従来からの学知と趣味の言語たる文語体への、読者・著者双方の願望があったと考える。書き言葉は洗練を求めるから、既に洗練されていた文語体への願望も、また書き言葉にとっての自然であったのである。すなわち明治初年期の言文一致体は、云わば自然に発生し自然に停滞していったわけである。

この自然を打破しうるのは、一つには「俗談平語」の精神であろう。民権派の小新聞が明治10年代によく口語体を維持し得たのはそのためだろうが、しかし、福沢諭吉の実践を見れば分かるように、「俗談平語」の精神は口語体でない限り維持できないという性質のものではない。口語体の文章は、従来の多数派、文語体の中に埋没していったというのが、10年代の趨勢であった。

転換にはまず、ある種の理屈が必要であった。それは、明治10年代の後半いわゆる欧化主義の時代に、新たな欧州文章の発見となって現れた。この時期の「言文一致論」には、日本語からの内的な必要性の指摘（それは先に示した口語体の「平易さ」に絡む）とともに、欧州言語の事情が述べられている。そもそも仮名文字派、ローマ字派を問わず、表音文字国字化派は、欧州の文章が表音文字をもって書かれていることを文明発達の一因と考えていた。言文一致論者の多くも又、この表音文字国字化派と共通の認識をその出発点としていた。と言っても、「言文一致派＝表音文字国字化派」というわけではなく、要は、「欧州の文章は」という認識である。「言文一致」は云わば「開化」の標識であり、用語こそ「開化」から「進化・進歩・改良」などにずれ込みつつも、その理屈は明治初年期の自然化した開化論的言文一致実践の、より理論化した反復であったのである。例えば、次のような主張群がある。欧化主義的部分には直線の傍線を、平易さの指摘には波線を付する。

又欧米諸国の如く言文一致たらしめんことも頗る難き業なれば之を急遽に望む可からずとは雖ども今日よりして文章の方向を定め他日こゝに進化せしむるの計画を立んことは成し得べからざるに非ざるなり

（福地源一郎「文章の進化」18年7月「東京日日新聞」）

我国今日の文学を以て欧州諸国に比較するに遙に幼稚の地位に立てることは学士の能く知る所なり……………然らば則ち如何なる文体か能く此想像を網羅するに適すべき乎余輩之に答へて曰はん今日の言語に一致せる文体こそ能く諸種の想像を網羅すべし」と……………余輩是を以て常に我文章の未だ全く言語と一致せざるを歎するなり……………而して彼の「せざるべけんや」を改めて「せねばなりますまい」と云ひ「あらずや」を改めて「ありませんか」と云ひ「なり」を改めて「ござります」と云ふに至りては余輩は我文章を羅馬字に改めたる後にあらざれば十分に其目的を達する能はざることを信ず

（田口卯吉「意匠論——文学の部」18年8月「東京経済雑誌」）

文章と言語とは同一なるべきものにして只口にて述ぶるがゆゑに言語となり筆にて書くがゆゑに文章となるの差はあるとも言語は文章に通じ文章は言語と同じからざるべからざるや是れ亦勿論のことなるべし然れどもこは我々が何も左様に新奇の事を言ふものにはあらずして實際外国就中欧米諸国に於いては文章と言語と同一にして書に筆したるものも之れを朗読すれば言語談話と異ならざるを以ても決してこの言の新奇又は虚偽にあらざるを知るべし

（今日の日本の文章は昔と比べて）大いに易きを加へたりと雖も然れども今日の文章も矢張り言語とその組織方法を異にして之れを西洋諸国等の言文一致の国に比すれば啻に同日の断ならざるのみならず世の学者不学者が之れが為に苦しみ文明の進歩を害し知識の発達を妨ぐること実に少しとせず

（明治日報社説「文章の改良」18年11月）

かねて わたくし が かんがえて やまざる こと が ある ゆゑ にて、その こ

と という は すなわち「げんぶん いっち」、——ひと の はなす とーり に か  
く と いう こと にて、——これ が ため ざんじ しつれい を かえりみず(略)  
そー して みなさま よく ご しょーち の とーり どこ でも かいくわ し  
た くに で わ、みな はなす とーり に かく の が おー ございます。

ただ いんど、しな その た みぎ りょーこく に きょーくわ された くに、——  
すなわち にほん、ちょーせん、あんなん とー に あつて わ、——これ に はんし  
て、げんぶん が ふどー で ございます。(略)

よーろっぱ の ちゅーこ に あつては どーよー の ありさま で、ひと みな  
はなす に は ぞくご を もちいた わ もちろん なれど、かく に わ たいこ  
の らちんご を もちいました。さて その けつくわ わ、みな さな どー なつ  
た と お おもい なさいます か? かいた もの を げす ひと わ、ただ がく  
しゃ ばかり に なりました。(中略)

にほん わ どりつ の ていこく ゆえ けつして かれ これ の くべつ なく、  
みな おーべい の こと を まなぶべき に わ あらざれども いま もーしあげま  
した こと わ、おーべい しょこく に おこなわれる から と いう の で わ  
なく、その おのずから もちいらるべき りくつ を そのーる こと と ぞんじます。

(原ローマ字 チェンバレン「げんぶん いっち」「ローマジ ザッシ」24号 20年5月)

言文一致は文明の証票と或る人も言つた通り是ほど宜い事は無いと言ふ処から、近頃に至  
つては我国の文に関し、些しは焦慮する人も出て来たは実に忝い事だ。

(山田美妙「風琴調一節 緒言」「以良都女」1号 20年7月)

先づ其の改宗の動機から申せば、初め、西洋の文章は言文一致であると云ふ事に気が付い  
たのが、その一つ、それから、英国の文学史を見ると、詩人チョーサーの肖像が立派に出て  
居ます。此人こそは英国の文体を一変させた勲功者——此人が顕はれ、俗文を主張し、終に  
今日の英文を創始した偉功者であると思ふに付け……………

(山田美妙「明治39年の回顧」『明治文学の揺籃時代』)

以上は、この時期の言文一致論の理論的様態の特徴を述べたものである。おもてに現れた主張  
として、このように述べているのである。しかし、この明治20年前ころに言文一致論が一斉に  
沸き起こった理由については、より内奥の動機があったとも考えられる。明治10年代の中期ま  
では、知識人の関心は民権運動を中心にした政治に覆われていたと言えよう。単純に言えば、  
人々は政治と運動に多忙であつて、言語・文章の類にまでは目が行き届かない。一方、明治10  
年代の後半は、民権運動の挫折と国会開設の決定により、政治と運動に云わば一区切りが生じた  
時期なのであり、多忙だった政治青年達が文章・文学へ内向化した時代である。自然人々は、書  
き散らされ読み散らされていた政治小説やパンフレットの類が、真に己の感性・感覚にそぐわし  
いものかどうかを、点検せざるを得ない場所に立たされていた。そして点検してみれば、そこに  
見出された言語・文章は、時としていかにも空疎な漢語・漢文調の類である。未だ感覚的とはい



え、この新しい言語・文章への欲求が、この時期の「言文一致」議論の隆盛の深層に淀んでいたものと思われる。感性・感覚とそれが噴出させる理論との間には、ズレがあることが一般である。この時期、表層の理論としての言文一致論は「開化・進化」主義的なそれであるが、次の時代に言文一致の趨勢化を押し進めたものは、この時期に滞留した同時代の文章へのある種の違和感であったのではないかと思われるのである。しかし、それはまだ先の話である。

この「まだ先の話」に関連してくることなのであるが、次にこの時期の言文一致論の付随的な特徴を付け加えておく。

口語体にはその基礎となる話し言葉が存在していなければならないのは、無論である。その際種々の方言があれば、基礎となる話し言葉としてどの方言が選ばれるかが問題になる。この時期の「言文一致」論には、それを明瞭に「東京語」と指定する議論が現れてくる。明治初年期の東京には人口の巨大な空白が生じていたわけであるから、以下にも示す「中等以上の東京語」が「東京語」として存在していたわけではない。しかし明治10年代ともなれば、東京の人口は幕末期を凌駕するに至った（前稿参照）。教養層を考えてみても、多数の書生・彼らの教師・官員（旧幕吏も含む）・実業家たちの集積が東京に生じたのである。恐らくは、彼らの言語が「中等以上の東京語」であろう。そしてそれは本来、東京という「地域の言語」ではない。全国に「通用」する江戸期以来のスタンダード・ランゲージが「中等以上の東京語」を作り上げたのであった。そうでなければ、先に田口卯吉（「意匠論」）が示したような江戸期のスタンダードの流れを引く「せねばなりますまい」「ありませんか」「ござります」のようなことばが、「中等以上の東京語」として急速に形成されるわけがない。そしてこの種の言語は、啓蒙出版物、新聞や演説などの経験を経て、ほぼ全国に通用することを彼らは知っている。しかも重要なことは、明治初年同様この期の東京は、全国唯一の開化的言語・文化発信の拠点であった。これらの事情によって、この時期に「東京語＝標準語」という認識が、未だ明瞭な概念化に至らないままではあるが、肥大化していったものと思われる。

言文一致体の基礎となる話し言葉は、このようにしてほぼスタンダード＝東京語に定まっていた。この帰結として、東京語の使い手が言文一致体の書き手として大いに有利な位置を占めることになる。彼らは、そして彼らだけがやすやすと言文一致体を使いこなし、ここに「スタンダード＝東京語＝近代口語体」というトライアングルが形成される。彼らは文化発信の中心地の人間として、それを当然自然のことと考えるだろう。しかし、実はまだスタンダードと東京語の間には微妙なズレがある。それが後に特に二葉亭四迷の口語体に一つの問題をもたらすことになったのだが、それも又、後の事態である。以下、東京語通用論の例を示す。

さて この にちようぶんは こんにち はなしの とほり かみに かくことと すれば わが くのに ことばを いつていに せでは ならぬ わけ なり（中略）

ベランメイことばは まことの えどつことばかも しらねども おのれは かかる げせんの ことばを いはず いはゆる たうじ とうきやう ちうとう いじやうの ひ との もちふる ことばを すなはち みやことば として ひろく ぜんこくに ひろめん ことを のぞむ

（島野静一郎「かなぶみを みとほりに わくる ろん」18年1月「かなのしるべ」）

そこで その をしへ を おこさん には。まづ セイヨウ の をしへ に ならひて。ゴガク の いとぐちたる はなしかたうひまなび を つくり、その ことば は とうきやう の はなしかた を もととして。いなか の ことば をも たゞしき ものは とりあはせて(中略) その ことばづかひ の ほん を かきあらはす こととならば ゲンブン イツチ すなはち くち に いふ ことば と もの にかく ことば と おなじやう に かな ばかり にて かく こと となりて しだいに ガクカウ の をしへ も たやすくなり(中略) よ の すゝみ かはりに つれて ことば づかひ も しだいに たゞしく なり。(中略) わが く に の にし も ひがし も みなみ も きた も みな おなじ ことば と なる に いたらば(中略) イギリス、アメリカ にも おとらざる ブンメイの く に と ならん ことは うたがひなき こと で ありませう、

(片山淳吉「かなづかひ を あらためんか か、ことば を たださん か」19年4月「かなしんぶん」)<sup>4)</sup>

実に大坂の「さかい」や奥州の「なす」や又は長崎の「ばツてん」などは、其实古語に基づいて居るにもせよ、普通の言葉とは言へますまい。(中略) 普通の言葉を見出し、普通の語法を探出し、それを用ゐる事さへ出来れば最早十分の事でしやう。今東京語の性質を精密に吟味して見ると実に東京語ばかりが前の注文に合ふ様です。

(山田美妙「言文一致論概略」21年2・3月「学海之指針」)

美妙の言う「普通」とは、「普く通行する」の意味であるから、美妙は東京語が全国に通用する言語として、言文一致体の基盤たる話し言葉に適していると述べている。ちなみにその「普通」の理由を美妙は江戸以来の方言の混淆に求めるのであるが、これは勿論、転倒した意識である。繰り返し述べるが、東京語が普通語になったのではなく、普通語が東京語になったのである。

ところが更に、この転倒は次の付随の付随とでも称すべき事態を、生み出しつつあった。この時代には「江戸時代には下賤な庶民の語であったデス言葉が、明治以降次第に対等の丁寧語としての近代的性格を帯びて来」(山本正秀『近代文体発生の史的研究』、以下『史的研究』)た事から、デスを口語体ないし話し言葉に採用する意見が現れている。

ニッポン の ことば は ながすぎる よう です。……わたくし は ゴザリマスとか ゴザル とか、い う よう な ことを よして デス と いふ よう に したい と おもひます。

(末松謙澄演説 「かなのてかがみ」23号 21年4月)

同時期に、デスは山田美妙の口語体にさかんに取り入れられるのであるが、重要な点は、江戸下町の恐らくは芸人などを中心に使用されていたデスが、この時期に「東京語」化されていたこと、加えてそれが云わば堂々と「公用語」化されようとしていることにある。デスは、ゴザリマス・マス・マシタ・タのような本来のスタンダードではない。にも関わらず、スタンダードが東京語に吹き溜まる時期を経過したこの頃に、今や東京方言が、己をスタンダード化しはじめてい

るわけである。ちなみにデスは、今日でも己の出自の痕跡を留めており、映画「男はつらいよ」シリーズでテキヤの寅さんの口上は、「わたくし、生まれも育ちも葛飾柴又です」であり、演歌「仁義」でもヤクザの口上は、「手前生国と発しますところ関東です」とあるのである。いずれも星野哲郎作詞であるが、寅さんの口上は、浅草のテキヤ言葉に通じていた渥美清によってもたらされたものかも知れない。

この時期の言文一致論に付随するもう一つの問題として、「話し言葉」と「書き言葉」に関する概念上の混乱がある。「話し言葉」と「書き言葉」については、

話し言葉	{	口語体 文語体
書き言葉		

という、ある意味で非常に単純な構造が存在するのだが、主要な「書き言葉」が「文語体」であったこの時代には、しばしば無造作に「書き言葉」と「文語体」が一体的に、「話し言葉」と「口語体」が一体的にイメージされてしまう。少なくとも、「口語体・文語体」という文体の相異は、「書き言葉」内部の分化に過ぎないことに自覚的ではない。

例えば、言文一致運動で大いに力のあった神田孝平の言説、「文章論を読む」（「東京学士会院雑誌」18年2月）には、「平生説話の言語を以て文章を作れば即ち言文一致なり」のような記述がある。また先の片山淳吉も「言文一致、すなはち口に言ふ言葉とものに書くことばと同じやうに」と述べ、これも言文一致運動上影響力の大きかった物集高見『言文一致』（19年3月）では、「文章は、はなしを、書いたものと、いふことは、誰れでも、よく、知りてをること、其ちがひめと、いふ所は、口から出すのと、筆から出すのとの、ちがひである」と述べられている。

本節初めの第一として述べたように、書き言葉には①～③のような特徴があるから、「話すように書いた」文章がただちに口語体の「書き言葉」として通用するわけではない。しかし、例えば子供が「話すように書く」ことを額面通りに受け取るような場合を除いては、「書く」上での留意点としては①～③の特徴は、それほど実践的な問題にはならないとも既に述べた。相応の難しさは存在するにせよ、①～③は実践されるのである。しかし理論としては、「話し言葉」と「書き言葉」である「口語体」を無造作に結びつける言文一致論は、非言文一致論者の批判を招くことになった。更に①は、文語体にせよ口語体にせよ、書き手の努力と才知が要求される事柄であって、書き言葉の自然の性格ではあっても、自然に成就する事柄ではない。そこで、取り分け文章見本の乏しい口語体にあっては、文語体以上の困難が予想されるのであるが、その困難が「書く」ことの困難と言うよりも「口語体」の困難として認識されやすいわけである。

例えば、「文章は、はなしを書いたもの」と簡単に考えた物集高見は、後に非言文一致論に転向したのだから、その非言文一致論の根拠として「会話文」（話し言葉）と「記録文」（書き言葉）には本質的な違いがあるので、言文一致は「会話と記録とを一にせんと言ふが如き難事を企てる」ことになると述べるようになる。「会話文」を「はなしを書いたもの」としての口語体と同一視すれば、「口語体＝話し言葉」を性格の異なる「書き言葉」と「一にせん」ことの困難は、これは当然のことである。

また以上のような無造作さは、次のようにある程度欧州事情に通じた人々から、欧米でも会話と筆記の言語は異なるとの批判をあびることにもなった。辰巳小次郎「駁言文一致論」（「学海之

指針」20年8月～10月）は、「談話と書物は別類なる事」を論じて五項の別を指摘し、そのこと自体は興味深いのであるが、次に「若し言文一致と云ふ時は小児の単語、老人のオヨズレゴト共に皆文なりと云はざるを得ず」と述べて馬脚をあらわす。「話し言葉＝口語体」と考えるから、オヨズレゴトが口語体の非難のために使われるのである。辰巳は又、「日本人の内にはセイヨウにては言文一致ならんと思ふ人おほけれど其突然らず」と述べ、既出のチェンバレンの議論に対して「英吉利に於ては言文一致ならば、日本人にして英書を読む者皆能く英人と談話するを得べき筈なるに、単に英書を読むのみにては十年勉強するとも、二十年勉強するとも到底円滑の談話は覚束なし」と、ある意味でもっともの事柄を指摘し、所詮は「英吉利、亜米利加には言文二途」なのだから「余はチェンバレン君に望むに日本国に於て言文一致を計画せらるゝより、寧ろ御生国の英国に帰り給ひて言文一致を計画せられんを以てす」と結んでいる。

辰巳小次郎は東京大学予備門の教師で政教社の社員であり、軽薄な言辞の中に英人にして東京大学教授のチェンバレンと彼を仰ぎ見るローマ字会への敵意が見え隠れするけれども、この種の批判は、それなりに言文一致論者に理論的な打撃を与えたものと思われる。辰巳は「話し言葉＝口語体」と考えていたわけであるが、言文一致論者もまた「話し言葉＝口語体」と述べてきていたので、二つの見当はずれが一致すれば、矢は的を射ぬいてしまうのである。

ちなみに、翻訳家として著名な森田思軒もまた「談話と文章は劃然二物にして決して之を一にす可らず談話と文章とほとんど相同しと云へる西洋の文章にても尚ほ全く談話と一なること能はず」と述べて、自らも口語体を用いようとはしなかった。言文一致論者の「話すとおりに書けば言文一致体になる」という主張から、「話すとおりに書くことはできない、だから言文一致体は不可能だ、現に西洋でも話すとおりに書いていない」（『日本文章の将来』21年）と議論を組み立てている。しかし、確かに欧米の文章は「言文一致体」なのであるから（文語体ではないのであるから）、そこから出発すれば議論は逆に「書き言葉」と「話し言葉」の差異にたどり着くはずのものであるが、「話し言葉＝口語体」という連結は、それほどまでに強固なのであった。

しかしながら、明治20年前後の最も強力な文学的言文一致体の実践者、二葉亭四迷と山田美妙は、さすがにそのような誤りから免れていた。

山田美妙は、「人々が談話するありのままを直写すれば更に趣味なし」とする内田魯庵の批判（「山田美妙大人の小説」21年「女学雑誌」132、134号）に対して、次のように応えている。

日常の会話をそのまゝに出したからとて或る一種の哲学者を除くの外決してそれが「美」を為して居るとは誰が言ひまじやう。……その所謂日常の会話といふものは所謂完全な形を取って行はれて居るものですか。……これでいはゆる真性の会話、即ち極普通の俗人の会話とその会話を用ゐて字にあらはすその裁縫が出て来ます。凡俗の言語と弁士の言語と相違の有るのも同理でしやう。……言文一致と名には言へ、写真の主とするだけの言文一致なら何の甲斐もありますまい。

（「不知庵大人の御批評を拝見して御返答までに作つた懺悔文」21年11月「女学雑誌」135、136号）

次の二葉亭に比べて明瞭を欠くところが無いとは言えないが、会話そのままと口語体の文章の間に質的な相違のあることを、指摘している。

また二葉亭四迷は、次のように述べている。

世に一種の論者有り 曰く欧米諸国に於ては言文殆と一致なれとも全く同一なるにはあらず、唯々その懸隔極めて少きのみ」ト 余は此言を聞いて少く疑ひなき能はず、抑々此説は欧米諸国の言文を如何に比較して立てたるものなりや、欧米諸国には二つの文法なし、言語も文章も皆同一の文法を奉するもの也、勿論平生の談話は唯便を一時に取るか故に整齊を欠くか常なり、必ず欠かざる可らざるにあらず、自らに欠くやうに成るなり、……謂ふに彼れ論者は欧米諸国語の平生の談話には整齊を欠き文章を綴る時には極めて整齊なるを見て早まりて言文一致ならずと論定したるものならん、

(『くち葉集 ひとかごめ』21年頃)

「話すとおりに書く」ことを反対根拠にして行う言文一致体批判は、美妙・二葉亭には通用しないのである。

### 3. 山田美妙の言文一致体

既述のように、山田美妙・二葉亭四迷は、近代言文一致体の二枚看板であった。例えば、次のような記述がある。「明治20年代の文化の独創といえ、二葉亭四迷や山田美妙による新しい日本の言語（近代言文一致体）の創造のことを思いださないではいられない。」(色川大吉『日本の歴史21 近代国家の出発』1967)

この種の通念がいかに形成されたか、そのこと自体がいずれ我々の考察の対象にならなければならないが、明治20年代の当初においても、両者は確かにある意味での「言文一致体の著名人」ではあった。まず、より華々しかった山田美妙を取りあげよう。

山田美妙の口語体は、本稿1、2節で記述した明治初期以来の口語体、及び欧化主義的な言文一致理論の延長線上に位置づけられる。

山田美妙の口語体の文章は、次のようなものであった。

知盛の今日のむねぐるしさ、わざと従容として無理に笑顔を売るものゝ、その笑顔は冬野の寒菊、無常の風を待つのみです。主上に対する眼、女房どもに向ける目眦、いずれの優劣なく無念の露を宿して、否帯びて、むしろ色は、今まで蒼ざめて居たのが次第に紅く為つて行き、いつの程にか髪の毛も針を植ゑて居るやうです。

かなはぬまでもと思ふ心は今でも知盛の胸には充ちて居ますから一寸帰つて主上に拝謁するや否や更にまた引返しては敵に近付いて士卒をはげまして居ます。……

それから何を話して居るか元より秘密にしたことゝ見えて次の間へ行つて聞いてもよくは聞えませんが、たゞ非常に嘆きかなしむ声がします。

(『蝴蝶』22年1月「国民之友」)

周知の通り「蝴蝶」は、その文章の巧みさ或いはあくの強さが、挿し絵裸体画とともに大変な

話題となって、弱冠20才（満年齢）の美妙をしてこの時点での文学的トップスターたらしめた。しかし、文章として見れば、「蝴蝶」の文体は、次のような小新聞口語体とさのみ異なったものではない。「蝴蝶」が、明治初年期以来の口語体の延長線上に位置づけられる所以である。

先月三十一日の午後三時四十分ごろより巢鴨三丁目十三番地の鍛冶屋兼次郎の家より火事が始まり九十六軒やけて火元でハ婆さんが一人焼死に同日の夜る浅草寺々中泉凌院の上地町家福島福太郎の明き家よりも始まりどんどん焼けてあるうちに二三軒へ飛火がいたして彼方此方よりも燃出しやがて其火が一ツに成ツて猿若町焦点、聖天町、山の宿やぶ未新道瓦町そのほかを焼き払ひ家かず千百九十六軒やけて消ました

この火事の時に東橋際の待乳といふ写真師ハ家も片付ずに火の粉の来る物干に出て火事の写真を取て居ましたがこう職務に勉強するのハ感心な事であります。

（「読売新聞」10年1月4日）

小新聞の口語体は、明治10年頃を頂点にして次第に文語体にとって代わられてしまうのであるけれど、この種の口語体は一時期小新聞界に氾濫していたのであるから、東京生まれで東京育ちの早熟な美妙が全く目にしていなかったとは考えにくい。また美妙の事情はどうであれ、この口語体自体は、一般読者にとって特に奇異なものではなかったはずである。特異であるとすれば、それが文学＝小説の言語として現れていた点にある。

一方、美妙は、先にも引用したとおり、「言文一致は文明の証票と或る人も言つた通り是ほど宜い事は無い」と、時の欧化主義の潮流に棹さして、云わば時代の波に乗っていた。美妙が欧化主義的な言文一致理論の延長線上に位置づけられる所以である。ところが美妙は、「蝴蝶」以前の口語体としては、いわゆる「ダ体」＝常体を採用していた。小新聞口語体がダを採用することは無いでもないが、やはりほとんどが「マス体」＝敬体だから、「ダ体」の採用には、それなりの理由があったはずである。また「ダ体」から「マス体」への移行についても同様である。

美妙が「蝴蝶」以降一貫して「デスマス体」を採用するにあたっては、次の「上流・下流」理論とでも言えるような理屈があった。

はじめ言文一致の基礎にするのは何が宜いかと考へて、まず第一、「簡略」の徳のある物を拵ばうと掛りました。これは従来の和文が冗長に過ぎた点、それを避けやうと第一思つた結果です。それで「簡略」の点で上中下三流の語法をしらべると、今思へば間違つて居ましたが、下流の語法が一番その点に於て及第するやうでした。それからその語法を用ゐて来る、さう為ると第一に当惑したのは「何々ダ」といふ語法が出て来たことです。「ダ」は音調さへ甚だ耳に立つものを更に下流であらう用ゐればよいよ怪しく見えて来ました。……後にまた深く調べて見ると実に案外、中流と下流との間には対して簡冗の相違が無いのです。……元来下流の用ゐられたのはその簡であるが為でした。それが左様ではありません。ならば下流はどうしても中流に一步ゆづる訳です。

（「不知庵大人の御批評を拝見して御返答までに作つた懺悔文」 同前）

美妙の「上中下三流の語法」とは、「上・中・下流に対する語法」の意で、おおむね今日の丁寧・ぞんざいに当たる。美妙は「中流」を「同等に対する語法」とも言っている（『言文一致論概略』）。当初は「上・下」二段階観であったのを、三段階観に転じたのである。「上・下」二段はそれぞれ「行衛が知れません」「行衛が知れない」の様であったが（20年「自序」<sup>9）</sup>、「上流」としていた「マス体」を前出「懺悔文」では「中流」としているのも、特に指定辞についての考察が進み、「デゴザイマス」「デス」「ダ」をそれぞれ「上・中・下」に改めたのであろう。後の『日本大辞書』の編纂をもあわせ、美妙は言語学者にこそ適していたようなところがあった。

美妙は生涯気が付かなかったようであるが、ダ体からデス体への転換は、その現象面ではなく本質的に、美妙の言文一致体にとっての躓きの石であった。デス体では駄目だったのだ。だがそのことを述べる前に、まず美妙の功を讃えなければならない。

山田美妙による言文一致体の最大の功績は、とにもかくにも美妙が「文学（小説）」の言語として口語体を採用したということにある。言文一致体で「文学」が行いうることを示した点にある。既に本稿は、美妙の口語体が「小新聞口語体」の系譜を引くものと述べている。しかし、小新聞の「新聞」「雑報」「寄せ書き」などは、今日でもそうであるが、まず文学とは見なされていなかった。その意味では美妙自身も、小新聞など眼中に入れていなかったであろう。そうでなければ、当初にダ体を採用し、後に相応の苦心をはらってわざわざ小新聞類似のデス体に転向したことの説明が付かない。一方、明治20年前の時点、『小説神髓』『当世書生気質』以来、知的な世界における「非政治的」文学・小説の地位は大いに高まりつつあり、その権威は増大した。その「文学・小説」の言語として口語体が採用されていなかったのは、口語体が高尚な文学趣味に反するとみなされていたからである。ここで美妙によって「高級文学」の言語として口語体が採用されたことは、ある意味で画期的だった。言文一致論の多くが、その実用性＝易しさを根拠に主張されていたことも、思い起こされるべきである。「高級文学」は、非実用的なのである。

このとき、これに関わって円朝落語の速記本出版の影響が論ぜられることが多い。美妙自身次のように述べている。

なるほど雅文体には俗文体の及ばない様な処も有るが、俗文体だとして塩梅さへ巧みに為れば、中々雅文体に劣る所も無く、而も自然に規律も有つて言ふに言はれぬ妙味も有る。此小説の文などをば、稍此辺に注意して書いたもので、一口に言へば円朝子の人情噺の筆記に修飾を加へた様なもの。

（山田美妙「風琴調一節」「緒言」20年「以良都女」1号）

また、二葉亭四迷も次のように述べている。

そこで、坪内先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は円朝の落語を知つてゐよう、あの円朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。／＼で、仰せの儘にやつて見た。

（二葉亭四迷「余が言文一致の由来」39年5月「文章世界」）

しかし、美妙・二葉亭を含め、明治20年前後の言文一致体について、円朝速記の影響をそれほど重要視すべきではなかろう。一つには、円朝速記はこの時期の言文一致運動理論にはほとんど影響を与えていない。「理論」に円朝の名が現れることはまず無いのである。円朝落語は、やはり意識的に「書く」ということをしておらず、速記は、円朝の意識の「外」で生じた出来事なのであるが、理論はもとより「書く」ということに関わっている。円朝の名が現れるのは、言文一致体が「文学」に関わる限りである。ところがその文学に関しては、美妙・二葉亭は、自らの「文学」と円朝の「文学」に質的な差があると考えていたはずである。その内容を点検してみれば、円朝は江戸戯作の系列に属し、一方美妙・二葉亭はやはり西洋派なのである。特に『浮雲』の文体と円朝落語の文体との間には、大きな径庭が認められると言わねばならない<sup>6)</sup>。

とはいうものの円朝筆記は、彼らにとってある決定的な意味を持っていた。それは、円朝筆記は、彼らの文学と質的に異なるにせよ何にせよ、とにかく立派な文学である、とすれば文学（小説）は口語体で可能であるはずだ、という確信である。登山において初登攀と二登以後では、その価値が全く違う。それは単純な技術的難易とは、おおよそ異なる理由による。初登攀者は常に不可能の不安に苛まれるが、二登以後の登攀者は「登れるはずだ」という確信に励まされるのだ。円朝速記は同様な意味を、文学的な言文一致主義者に与えただろう。円朝速記が立派な文学であるならば、内容的・質的にどうであろうと、とにかく言文一致体で小説は書けるはずだ、という確信である。この時、例えば美妙の功名意識は、これを解剖すれば次のようなものであったのではなかろうか。円朝速記は文学になっている、言文一致体で文学は可能である、一方、円朝は初登攀者ではない、彼は「書く」文学者ではないからだ、しかし鹿に下れる崖は馬にも可能なはずである、自分は言文一致体による「文学」の初登攀者である。美妙は、「一口に言へば円朝子の人情噺の筆記に修飾を加へた様なもの」と述べているが、「円朝子の人情噺の筆記」が「書き言葉言文一致体」ではないことを知っていた。事実、論じられるのはせいぜい「影響」であって、後世誰も、円朝が言文一致の嚆矢であるとは称えないのである<sup>7)</sup>。

小説を書くには才能が必要である。山田美妙は才能の壁を突破しなければならない。もう一つ、いつの時代にもうるさ型と呼ばれる人々がいる。言文一致体で小説を書くには、文章についての趣味の壁を突破しなければならない。それを突破した美妙は野心家であり、その野心を実現するだけの才能と勇気があった。云わば美妙は、腕と度胸で言文一致体の小説を書いてのけたのである。いや、腕ならば職人がいないではないのだから、美妙はほとんど度胸一つで言文一致体の旗手となったわけである。

このことは一面称賛されてよい。しかし他方では、ダ体からデス体への移行も関わって、美妙の口語体の内的な弱さを物語っている。関連して、例えば山本正秀は次のように述べている。「美妙自身が挙げた言文一致の動機を見てあきたらなく思われるのは、近代的な文学観に根ざす内的必然性からの動機が少しも述べられていないことである。」（『史的研究』）更に山本は、「近代的な文学観に根ざす内的必然性」について、次のように述べている。「（美妙は）「だ」調の有する、近代文学に大切な客観描写にふさわしい排主観非敬体の性格については盲目であって、もっとほりさげていえば、言文一致体の根底に横たわる重要事としての近代リアリズムの文学意識が美妙に希薄であったからにはほかならない。」（『史的研究』）

確かに「近代的な文学観に根ざす」小説では、「ダ」体＝常体が使用されており、美妙はその



流れに結果的に逆行してしまった。しかし、「だ」調が非敬体というのは当然だろうが、非敬体だとなぜ「排主観」になるのであろうか。なぜそれは、「客観描写にふさわしい」のであろうか。確かにデス・マス体は「語りかける」という性格を持ちやすく、それは常に小説にふさわしいとは限らないが、美妙の小説に「語りかける」という性格がことさらに強いようには思えない。それでも敬体は、小説に関して「簡略」でない余分な要素とは言いうるかも知れない。では何に対して「余分」なのであろうか。後に述べるように、それは「思考する」という事柄についてであろう。美妙がそこまで考えていたかどうかは分からないが、思考には敬体は不要なのである。しかしである。ならば、文語体ではふつうには敬体を用いない（手紙などは別）のであるから、文語体に帰ればよいではないか。ここに美妙にまつわるトリレンマが発生する。文語体はいやだ、ダ体は下流だ、デス・マス体は余分だ。が、いずれにせよ「近代リアリズム」とは異なる問題である。

本稿もまた、美妙の「内的な弱さ」は指摘した。しかし美妙は、野心と度胸で言文一致体小説を実現したのだから、内的に弱いのは仕方がないであろう。美妙にとっては、「近代的な文学観に根ざす内的必然性」などは、はなから問題にならないのであって、「常体から敬体へ」という流れは、この点に関する限り、美妙という当事意識において偶然の事柄に過ぎない。それどころか、言語としての言文一致体の史的展開を考える上では、「近代的な文学観」や「近代リアリズム」や「客観描写」などは、考慮の必要性がある事柄ではない。なぜなら、「言文一致体」と「近代リアリズム」などとは、それぞれカテゴリーが異なるからである。「客観描写」は文語体でも可能であり、逆に『八犬伝』のような勧善懲悪伝奇小説も、理屈の上からは言文一致体でも可能なのである。

明治初年期より、言文一致体は活字世界に存在した。一時弱まった言文一致傾向は、この時期、欧化傾向と元来の実用性の高さ（易しさ）が根拠となって、再び高まろうとしていた。一方で文学は言文一致体の一つの壁となっていた。円朝筆記は、言文一致体で文学が可能であることを実証した。山田美妙は、度胸一つで文学の壁を突破した。ここで起きた出来事は、当事意識的にはどれほどの困難が感じられてもそれだけのことであり、美妙が存在しなくとも、誰かが美妙の役割を果たしたであろう。

では、二葉亭四迷はその誰かの一人に相当するであろうか。その点は、節を改めて考えてみたい。

#### 4. 二葉亭四迷の言文一致体とその意義

本節では、『浮雲』の言文一致体の性格、またほぼ同様の意味になるのであるが、なぜ二葉亭四迷は『浮雲』を言文一致体で書いたのかという事柄を取りあげる。当然の事ながら、小説の言文一致体とは地の文章の問題である。しかし、『浮雲』では地の文と登場人物のいわゆる心内語の関係に微妙なところがあることを、まず指摘しておく。

以下の論述には幾つかの階梯が重なり合うので、初めにその見取り図を示す。論述は必ずしも見取り図の順序通りに進めるわけではない。

①『浮雲』の言語は、内語性の言語（「思い＝思惟」の言語）である。少なくとも二葉亭の言

文一致体は、それを動機としていた。

②「思惟は世界なり」というベリンスキイ哲学（＝ヘーゲル哲学）が、①を支えている。

③我々の日常の内語は、方言による非敬体の話し言葉である。

④この時期東京語は、スタンダード化していた。

⑤以上により、『浮雲』の言語は、話し言葉スタンダード（＝東京語）に基づくことになった。

これが、我々のよく知っている言文一致体である。

⑥『浮雲』の主人公文三は、作者である二葉亭の分身的性格が強い。

⑦以上の結果、文三の内語と地の文における語り手の内語とが一体化する傾向が生じた。

二葉亭四迷が言文一致体で小説を書いたそのいわれは、二葉亭自身によって次のように語られている。既述との繰り返しを含んで提示する。

是はどうでも言文一途のことだと思立ては矢も楯もなく文明の風改良の熱一度に寄せ来るどさくさに……

（『浮雲はしき』20年）

で、雅俗折衷の文などは書けないから、何でも思ふことが楽に書けるやうにといふ訳から、言文一致でやり始めた。

（『文談五則』40年）

何か一つ書いて見たいとは思つたが、元来の文章下手で皆目方向が分らぬ。そこで、坪内先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は円朝の落語を知つてゐよう、あの円朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。

で、仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京弁だ。即ち東京語の作物が一つ出来た訳だ。早速先生の許へ持つて行くと、篤と目を通して居られたが、忽ち確と膝を打つて、これでいゝ、生じつか直したりなんぞせぬ方がいゝ、とかう仰有る。

自分は少し気味が悪かつたが、いゝと云ふのを怒る訳にも行かず、と云ふものの、内心少しは嬉しくもあつたさ。それは兎に角、円朝ばりであるから無論言文一致体にはなつてゐるが、茲にまだ問題がある。それは「私は……でムいます」調にしたものか、それとも、「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふことだ。坪内先生は敬語のない方がいゝと云ふお説である。自分は不服の点もないではなかつたが、直して貰はうとまで思つてゐる先生の仰有る事ではあり、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが言文一致を書き初めた抑もである。

暫くすると、山田美妙君の言文一致が発表された。見ると、「私は……です」の敬語調で、自分とは別派である。即ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ。後で聞いて見ると、山田君は始め敬語なしの「だ」調を試みて見たが、どうも旨く行かぬと云ふので「です」調に定めたといふ。自分は始め、「です」調でやろうかと思つて、遂に「だ」調にした。即ち行き方が全然反対であつたのだ。

けれども、自分には元来文章の素養がないから、動もすれば俗になる、突拍子もねえことを云やあがる的になる。坪内先生は、もう少し上品にしくちやいけぬといふ。

（『余が言文一致の由来』39年）

「由来」は何分にも言文一致の試みの頃から20年程経っての回想であるので、文脈の前後に勘違いがあるかも知れない。しかし、全体を記述の通りに受け取れば、二葉亭が「「です」調でやらか」と考えたのは、『浮雲』以前の明治19年のことであろう。二葉亭が坪内逍遙のもとを初めて訪れたのが明治19年1月であり、失われた「通俗虚無党形氣」の原稿を逍遙に手渡したのが、3月のことである<sup>8)</sup>。その「通俗虚無党形氣 近刻」というお披露目文には、「加之言文一途の主義に基いて紳士社会に行はれまする上品な東京語を以て翻訳して御座いますから至極面白く出来てをりまして悪く申せば円朝子の猿真似ですが賞て申せば此小説なぞが日本新文章の嚆矢に相成りませうか」とあって、「由来」にある問答が、確かに言文一致体に関わる最初のものであるならば、それはこの「通俗虚無党形氣」に関して（ないしはそれ以前）であるはずだからである。しかもこの辺りに関して、「突拍子もねえことを云やあがる」式が問題になっているのであるが、まさか「云やあがる」式に地の文が書かれようとしていたわけではあるまい。逍遙は、「彼は此（「通俗虚無党形氣」のこと——野村）以前にも、三十ページばかりの口語訳を見せたことがあつた」と述べ、更に「それは、たしか、ゴーゴリの或作の一片で、中産階級の夫婦が互ひに何事かをやゝ激して談じてゐる件であつた。それが彼と私とが口語体の是非長短を具体的に論じ合つた最初の題材であつたのだ。そのゴーゴリの訳調は、譬へていふと、裏店調（プロレタリア調）とでもいふやうなぞんざいな口吻のものであつた。「これでは中流社会とは思はれない」といふと、「いや、外国の夫婦は対等だから、斯う訳さなければ、真相に遠いと思ふ」といつて、夫婦の問答が、共に敬語なしの「おまひ」、「おれ」、「さうかい」、「さうしな」といふ調子で書いてあつたのであつた。」（『柿の蒂』）と続けている。「突拍子もねえことを云やあがる」は、「さうかい」「さうしな」に対応しており、恐らくは会話文についてであろう。地については「です」調か「だ」調かで一時迷いながら、結局は「だ」調に決定したということなのではあるまいか。

なぜ二葉亭四迷は、この時期に口語体で小説を書いたのであろうか。

二葉亭は既に、「ロシア文学」に関する限り時代の第一人者であつた。「浮雲はしかき」の「文明の風改良の熱一度に寄せ来るとさくさに」などは、二葉亭一流のおちゃらけではあろうが、やはり二葉亭も全体としての欧化の流れの中にいたことは確かかと思われる。だが、その場合の口語体の文章見本は、小新聞口語体であり円朝速記となろう。それは見てきた通り、必ずいわれる「デス・マス・ゴザイマス」式の敬体の文章である。二葉亭の場合は、「だ」調に決定して以来一貫して常体の口語体であり、揺れが無い。とすれば、問題は更に、なぜ二葉亭はこの時期に常体で小説を書いたのかという事柄に限定されるのである。

二葉亭の口語体には、「内的な必然性」があるとして、山本正秀は次のように述べている。

言文一致の問題は、『小説総論』だけでなく、「現実の真味を如実に描写する」（『平凡』）写実主義や「人生の味わひを言ひ取るのが小説家の本分」（『長谷川二葉亭氏「浮雲」の由来及び作家の覚悟論』）と心得た強固なリアリズム精神に支えられたところの、二葉亭にとっては正しく必至のものであつたことというまでもあるまい。くり返していえば、二葉亭が目ざした文学は、東洋流の文人趣味や道楽的な戯作ではなくて、根本の人生問題に重きを置いた人生のための近代文学で、「真理に新しい生命を賦して其生命を直接に具体的に再現する」

のにあり、人生の説明ではなしに人生の真味発揮のための「描写」が不可欠必至のものであった。ここに二葉亭文学における人生の真味を描写するための活きた言文一致の新文体創造に対する確固たる内面的要求並びに必然性があり、二葉亭自身そうした自覚のもとに果敢にこれを成しとげようとしたわけだ。

(山本『史的研究』)

そして対蹠的に、美妙については、3節で示したように「内的必然性」無しと評価されているのである。

しかしながら、「写実主義」や「リアリズム精神」は、なぜ言文一致体と結合しなければならないのであろうか。「小説の主脳は人情なり。世態風俗これに次ぐ。……老若男女善悪正邪の心の中の内幕をば洩す所なく描きいだして周密精到」(『小説神髓』)と「徹底した写実主義」(中村光夫『日本の近代小説』)を主張する坪内逍遙は、その小説実作『当世書生気質』を文語体で行っている。既述のように、文語体をもってしても写実主義は可能だからである。

また、中村光夫は二葉亭四迷の文体について、「山田美妙の『武蔵野』と並んで、口語文による小説の最初の試みでした。……『浮雲』の文体は今日の口語文とはかなり異なつた感じのもので、ことに第一篇は戯作の調子が濃くのこつてゐますが、「言文一途」といふ根本の態度は確立してゐたので、これは我国の近代小説の展開にやがて大きな意味を持つ先見でした。次にその描写の手法が、当時の小説の水準を抜いて、作者の思想や好悪をはなれた客観的なリアリズムであった点で、……これは異例であり、彼が自然主義の先駆者と見られるのも、このように「人生のありのまゝ」を描いた点においてでした。」(『明治文学史』)と、「口語文」と「リアリズム」を、並行的に論じている。両者の間に何か関連が認められそうな口振りと言わねばなるまい。

一方、伊藤整は、「彼はその頃から、何か新しい文体、戯作風な飾りを切り捨てた、誤魔かしのない、考へることをそっくりそのまま写せる文体が必要だと考へていた。」と述べている。(『日本文壇史2』)伊藤はこの指摘を、既出の「何でも思ふことが楽に書けるやうに」(『文談五則』)から導き出したのかも知れないが、「考へることをそっくりそのまま写せる文体」というのは、「客観的なリアリズム」とは異なっている。

本稿は『浮雲』の文章を、伊藤整が言う「考へることをそっくりそのまま写せる文体」による文章であり、内面の思いの言語すなわち「内語」性の強い文章であつたと考へる。そしてその内語は、「口語体の、それも常体の」、更に二葉亭にあっては「東京語の」言語でなければならなかった。そこでまず、『浮雲』の文章の言語的特質を検討してみよう。

人間の内面がすべて言語で満たされている訳ではないだろうが、内面の言語すなわち内語は、言語の歴史とともに古い。といっても、それは大したものではない。家では「めし、風呂、寝る」としか外語を発しない男にも内面はあり、内語もある。「課長のやつ、何にもあんなに頭ごなしということもない」くらいは思うのである。かつては、その内語が「夢と知りせば覚めざらましを」(古今集)式に、直接的な作者の内語性を維持したままパブリックに文学と認められる場所は歌であつた。しかし、歌は様式化する。制度としてそしてその限りで、内面の言語が公認されるのである。それ以外の内語は価値なしとして、文学の世界ではまず認められない。その認められなかった内語に、『浮雲』は満ちていると言わねばならない。

その内語の文法は、話し言葉の文法である。本稿は、どれ程文語体の読み書きに慣れた人間であっても、日常茶飯の内語は口語であろうと考える。森鷗外の『舞姫』は、太田豊太郎の「我と我が弱き心」の告白ではあるが、その告白はどこか文語体に守られているところがある。文語体が内面の防護壁になっているのである。『浮雲』の口語体は、その内語性に由来する。内語は口語だからである。これが『浮雲』が言文一致体によって書かれた単純といえれば単純な理由である。ちなみに美妙の口語体には、内語的性格がほとんど認められない。

内語は口語ではあっても、敬体は使われない。丁寧語「デス、マス、ゴザイマス」は、対・聞き手性の敬語である。内語にはふつう丁寧語は現れない。我々は例えば道でお金を見つけて、「あっ、一万円札だ。」と思うのであって、「あっ、一万円札でございます。」と思うことは無い。逍遙は二葉亭に常体の採用を勧めるに当たって、敬体の「まだるこしさ」を指摘している。なるほど「まだるこしい」には違いないが、その「まだるこしさ」は不要な対・聞き手の要素の付け加えによって生ずるのである。また歌は、制度化された内面の言語であった。だから、丁寧語は普通使われない<sup>9)</sup>。近代歌謡曲においてもそうである。1970年頃までは、歌謡曲の歌詞には基本的にデス・マス体は使われない。「雪が溶けて川となって流れてゆきます」だの「もうすぐ春ですねぇ」だの（「春一番」1976 作詞・阿木耀子）いうのは、70年前後の歌謡曲の言語変化によって発生した「ふれあい型語り掛け歌謡」とでも称すべき特異な文体である。小新聞談話体で見たような「語り掛けたい」と気持がデス・マス体となって発露するのである。

本稿は、明治初年度の「開化啓蒙体」や「小新聞体」を言文一致体の正統嫡子と見なしながら、これらのスタイルの敬体性を主題的には問題にしないできた。開化啓蒙体や小新聞体の「ゴザル、ゴザイマス、マス、マシタ」などは、その対・聞き手性によって、云わばやさしく語りかけるスタイルとなる。それは立派な言文一致体ではあるが、このスタイルしか持たない言文一致体は、言文一致としては不十分ではあろう。書き言葉口語体が、常に「語りかけたい」という気持ちを代表しなければならないわけではないからだ。そして、このようなデス・マス体に固執したことが、美妙の蹉跎の要因ともなったわけである。

論理的思考の文章（論説文）でも、対・聞き手の要素は必要とは言えない。思考に必要無いかからだ。ただし必要の無い、場合によってはうるさい要素ではあるが、論説文は敬体でも書き得ることは、「開化啓蒙体」が証明している。また小説は「物語・お話」でもあるわけで、本来は敬体でも常体でもどちらでもよいとは言える。円朝筆記が小説化すれば、こちらの方向に傾くであろう。円朝筆記型とは言えないかも知れないが、デス・マス体の『小公子』（若松賤子 23年）などにもその傾向が認められよう。敬体がどうしても不自然なのは、内語記述である。その内語記述においてまず文語体が突破されてしまったことは、日本語における言文一致の一つの特徴と考えなければならない。

内語の口語的特徴として、方言的性格が指摘できる。話し言葉は様々な位相を持ち、方言とスタンダードの使い分けもその一つである。ところが内語は日常茶飯の言語だから、当然方言なのである。二葉亭四迷は、元治元年（1864）江戸の尾州藩邸に生まれ、瓦解により明治元年から明治5年まで尾張、明治5年から明治8年まで東京、明治8年から明治11年まで島根、明治11年以降東京に居住していた<sup>10)</sup>。「所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京弁だ。即ち東京語の作物が一つ出来た訳だ。」というわけで、二葉亭の方言は、東京語なのである。

二葉亭の文章は、ダ体と呼ばれてきた。ダはデスとともに、東京方言ないし関東、東日本方言である。この時期、東京では「本だ、本です」と言うのである。関西あるいは西日本では、一般にヤとかジャとかダスとかドスとか言って、「本だ」とは言わぬであろう。時代はやや遅れるが、夏目漱石の『坊っちゃん』は徹底した一人称小説であって、その主人公が江戸っ子であることを効果的に示すために、地の文に「～ダ」が頻繁に現れている。ところが、全国普通のスタンダードは、本来「教養層の改まった場面での」言語であるから、どうしてもものの言い方が丁寧になってしまって、ぞんざいな乃至下品なと感じられるような要素は取り入れられない。この傾向は、特にぞんざいなダにおいて甚だしいはずである。だからダ体を使う二葉亭は（デス体の美妙とともに）、東京方言で小説を書いたのである。しかしながら、「東京方言で小説を書いた」という言い方には違和感がある。二葉亭にしても美妙にしても「東京弁だ、東京語だ」とは認めるにしても、「東京方言で小説を書いた」とまで意識していたであろうか。二葉亭は「東京語の作物」とは言っているのだが、実はこの点に、この時期の東京語の特異な地位がものをいうのである。

前稿で江戸山の手教養層の言語は、元来スタンダードであったと述べた。スタンダードの吹き溜まりが江戸山の手教養層の言語だったのである。明治初年期に一時その言語は空白化したにしても、東京の急速な発展とともに、多少の転変はあるにせよそれは再度蘇った。急速な回復が可能であったのは、元来がスタンダードだったからである。更に開化情報が東京に一極化するに従って、東京語には極端な文化的求心力が備わった。当初、開化情報は「ダ、デス」ではなく「マス、マシタ、ゴザリマス」などとスタンダードで発信されていたのだが、そのスタンダードは、同一の語形でありながら、転倒した当事意識の中では今や東京語として発せられることになった。つまり東京語はこの時期、「スタンダードだ、文句があるか」と言い得るほどの特権的な地位を獲得するに至ったのである。ダやデスが東京方言であるにも関わらず、それが意識されることもなく、あたかも全国通用の言語であるかのように振る舞うことが可能だったのはこのためである。二葉亭が平然と「即ち東京語の作物が一つ出来た訳だ」と放言できた所以である。またこの言辞を、当時も今も大方が異としない所以でもある。果たして大阪弁の著者が「大阪弁の作物が一つでけたわけや」とうそぶけたであろうか。二葉亭ならずとも、この明治20年前後に言文一致体の小説を書くことが出来た人々は、美妙、紅葉、鷗外（鷗外も言文一致体を試みている）、逍遙、嵯峨の屋、魯案（翻訳『罪と罰』）、緑雨、岩松賤子らは、みな東京人であった。地方出身者であっても、人生のごく早い時期から東京で暮らしていた人々である。交通規模が全国的になった時代に、生まれたばかりの言文一致体を用いるには、自分の話し言葉（特に文法的要素）が「方言」ではないかと意識されてしまっただけで、筆がのびのびとは働かないわけである。ここには更に、小説の地の文章はスタンダードであることが好ましいという意識が潜んでいる。活字メディアが一般化したこの時期には、言文一致体は堂々と、全国通行の文語体の後を襲わなければならないからである。

以上のような理由で、二葉亭においては「口語体の、それも常体の（ダ体の）、それも東京語の」文体が選ばれた。しかし、未だ十分検討されていない事柄が残る。二葉亭の文章は、本当にダ体なのだろうか、また『浮雲』の文章は、本当に内語的なのだろうか。

山本正秀は、『浮雲』も『武蔵野』も『初恋』も、当時「だ」調の代表作といわれたものには、「た」「ある」止めが絶対多数で、「だ」止めは僅少である。そこで当時彼らのいわゆる「だ」調

とは、……「た」「ある」「だ」止めの平話体・非敬体の言文一致体を指したことが知られる」（『近代言文一致体の文末辞法の語史的考察』）と述べている。また、遠藤好英は、『浮雲』の地の文の文終止の「ダ」を数え上げ、5例に過ぎないことを示している（『ダ体の文章の系譜』）。この「5」という数字はかなり微妙である。まず心内語であってもカギカッコ内のダは、当然地の文からは外されるわけであるが、残る地の文の5例の中には「フト正眼を得てさて観ずれば、何の事だ、皆夢だ邪推だ取越苦労だ。」（二編一八回 併せて1例と数えられている）の如き「文三の断定であり、心話であり、独り言」であるものが含まれ、一方「賈物だ邪推だと必ずしも見透かしてゐるでもなく」のように、カッコ外であっても心内語と認められる例は、用例数外とされる場合がある。そこでカッコがあろうとなかろうと、会話以外のものはすべて、しかも文終止に近いダ（「～だが」の如き）を含んで、用例数を数え上げると、『浮雲』のダの総数は49例になる<sup>11</sup>。これでは、やはりダ止めは少ないと言えそうである。

『浮雲』の会話部分でのダ止めは、非常に多い。これが『浮雲』をダ調とする印象を与えるのかも知れない。しかし、「ダ調」ということを考えると、ダとかデスとかいうことを盛んに称えだしたのは、まず美妙をめぐることであった。美妙では確かに文末のダ・デスの使用が目立つのである。「さう為ると第一に当惑したのは「何々ダ」といふ語法が出て来たことです」（美妙 既出）。「又語尾の「だ」の字、例之は旅行の体だ、貴人だ、有様だの如きは矢張り「いらつめ」や何かの如く「です」と書き直された方が穏当ならん」（石橋忍月「夏木たち」評）とも言われている。美妙については文字通りのダ体・デス体であった。

さて、そのダについて山本正秀は、既述のようにダそのものというよりも「非敬体の言文一致体を指した」とした。原則的にはその通りであろうが、その時、代表形態ないしネーミングに「ダ」が用いられていることに当事者の文体意識が反映しているものと考えられる。量的には大して用いられもしないダが、文章文体の象徴として考えられているのである。後の回想ではあるが、二葉亭もまた「即ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ」（「余が言文一致の由来」）と述べ、ダを文章文体の代表形態と認めている。そして「あひゞき」の末尾の印象的な「ア、秋だ！」によっても、作者・読者ともにその感覚が強められていたに違いない。すなわち、二葉亭について言われるダ体は、単なる常体を超えて文字通り、地の文がダで終わる文章と意識されていたものと思われる。用例の多寡ではなく、われ人ともに、「ダの文章を書いている」と認めてしまうことが決定的と思われるのである。

しかしながら、東京人の内語記述は東京語口語体を求めるが、その逆はただちには認められない。果たして『浮雲』の文章は、内語的な文章なのであろうか。

「近代的自我」と言われてきたよく分からない言葉がある。それは「近代的」なのだから、今から100年前には存在したであろうが、江戸時代には存在しなかったのであろう。すると「近代的自我」とは、ほとんど職業選択の自由（そこには恋愛や結婚の自由まで含まれる）と同義であることが分かる。いつの頃からか定かではないが、今では小さな子供までが「将来何になりたいか」と問われる。このような問いは、江戸時代にはまず存在しなかった。解答が決まっていたからだ。「将来の存在」意識は、現在の「存在意識」に決定を迫る。青少年は、どんな俗物青少年であっても、自分が何者であるかを問われ続けるのである。しかも、職業選択の自由には、職業を選択しない自由、選択できない自由も含まれる。楽観主義は、どこでもいつまでも通用する

ものではない。自由が自由に実現できないときほど、己が何者であるかを痛切に問われる場合があるまい。その究極に、一旦実現したかに見えた自由が奪われる時があるだろう。その時に、問いは痛切の最高潮に達する。それは具体的には社会的な問いとして、場合によっては世間の針の筵として実現する。もともと職業選択の自由は、社会的な意味での自由であったからだ。

『浮雲』の主人公文三は、免職された男である。作者の二葉亭四迷も、将来外交官にだか何にだかなるために入ったかは知らないが、せっかく入った外国語学校を「免」された男であった。自分の意志で退学したなどという理屈は通用しない。社会的には同じことだからである。「(『浮雲』の) 三回あたりからは日本の新思想と旧思想をかいて見る気になった」(『作家苦心談』) などというのは嘘ではあるまいが、この余裕のある書きぶりは、士的なやせ我慢とも称するべきである。そして、その事も作家としての二葉亭は承知していた。「ダガシカシ……瘦我慢なら大抵にして置く方が宜からうぜ」。だから、主人公文三の内面は、根本的なところで生身の二葉亭の内面である<sup>12)</sup>。二葉亭というのは、酒をかつ喰らって寝てしまうが如き放埒が働ける男ではない。士的なやせ我慢の中にたずずんで考えざるを得ないタイプである。それ故、『浮雲』の言語は主人公文三の内面の言語なのであって、その内語性が『浮雲』の言文一致体の文章をもたらしている。十川信介もまた次のように指摘している。「文三の内面を直叙した」ような「内面描写が、その功罪は別にしても、言文一致体の文章でなければ不可能だったことはたしかである。日常の思考の生理から離れた文語文によっては、意識の奥底の微妙な流れをあるがままにとらえることはきわめて困難だからである。」(『明治文学 ことばの位相』)<sup>13)</sup>

というような理屈は、まさか全面的には通用すまい。『浮雲』の文体が第一編、第二編、第三編で異なっていることは、通説になっている。二葉亭自身は「第一回は三馬と饗庭さんのと、八文字屋ものを真似てかいたのですよ。第二回はドストエフスキーと、ガンチャロフの筆意を模して見たものであって、第三回は全くドストエフスキーを真似たのです。稽古する考えで、色々やって見たんですね」(『作家苦心談』) と述べている。この「一回、二回、三回」を「一編、二編、三編」に見なす向きがあり、回顧談でもあって確かにややこしいが、やはり「回」であろう。「稽古する考え」ともあり、引用箇所すぐ後に「三回あたりから日本の新思想と旧思想を書いて見る気になった」という既引用の箇所があるが、「書いて見る気になった」は第三回に相当であり、第三編にまで進んでは「日本の新思想と旧思想」どころではなかっただろうからである。それにしても、文三の内面の直叙は第二編、第三編あたりの特徴であって、第一編からそれが目立つわけではない。多少例を挙げてみよう。まず、内面直叙性が顕著なところ。

『浮雲』の末尾は、次のように終わって(中断して) いる。

が、兎に角物を云つたら、聞いてゐさうゆゑ、今にも帰って来たら、今一度運を試して聴かれたら其通り、若し聴かれん時には其時こそ断然叔父の家を辞し去らうと、遂にかう決心して、そして一と先ず二階へ戻つた。

(三一—一九)

「去らう」までは内面直叙であろう。末尾ばかりではない。

復職する者が有ると云ふ役所の評判も、課長の言葉に思当る事が有ると云ふも、昇の云ふ



事なら宛にはならぬ。加令其等は実説にもしろ、人の痛いのなら百年も我慢すると云ふ昇が、自家の利益を賭物にして他人の為に周旋をしようと云ふ、まづ其れからが呑込めぬ。

(二一九)

解らぬ儘に文三が……お勢の冷淡を解剖して見るに、何か物が有つて其中に籠つてゐるやうに思はれる、イヤ籠つてゐるに相違ない。が、何だか地体は更に解らぬ。……今目前にその事が出来たやうに足掻きつ躓きつ四苦八苦の末に苦楚を嘗め、然る後フト正眼を得てさて観ずれば、何の事だ、夢だ邪推だ取越苦労だ。腹立紛れに贋物を取つて骨灰微塵と打砕き、ホッと一息吐き敢へずまた穿鑿に取懸り、……

(二一八)

以上は形式的に地の文（「」無しの文）から、二、三引用した。次は「」付きの例。

「それはさうと如何しようか知らん。到底言はずには置けん事だから、今夜にも帰ったら、断念って言って仕舞はうか知らん。嚙叔母が厭な面をする事だろうナァ……」

(一一四)

このように、地においても文三の内面を直接に表現するには口語体でなければならないことは、言うまでもない。更にまた、次のように一見内語とは言えないような外部描写においても、その描写は文三の目に映じた外部の内語的描写とも言えよう。

俄にパッと西の方が明るくなった。見懸けた夢を其儘に、文三が振返って視遣る向ふは隣家の二階、戸を繰り忘れたものか、まだ障子の儘で人影が射してゐる……スルト其人影が見る間にムクムクと膨れ出して、好加減の怪物となる……パッと消失せて仕舞った跡はまた常闇。

(一一四)

「文三が振返って視遣る」までは語り手視点であっても、以後は文三視点による内語的描写とも言える。そして、このような外部描写の内語性は、「あひゞき」の文章の性格でもある。

しかしながら、一編～三編の文章の性格については、その評価は異なっている、諸家の示すところがよく似通っている。

第一篇には、近世江戸時代末期の戯作文調が、かなり顔を出しているけれども、第二篇、さらに第三篇とすすむにつれて、それぞれ次第にぬぐわれて素直な口語文調になつてゆく反面において、それに対応して、人間の見方、その造形のしかたが、きわだつてちがつて来ている。ひとくちにいうと、次第に人間の内部へはいりこんでゆき、ますます心理的になつていつている。第三篇にいたつては、ほとんど終始一貫、文三の腹のうちをかいているといえるくらい、ずつと内部深くはいつている。つまり、異なる文体を媒介とすることで、文学の方法までが各篇においてズレを生じているといえる。結果としては、人間のとらえ方が、深まつていつているのではあるが、完成のしかたからすると、少しずつねじまがつて来ている

こともたしかであろう。

(稲垣達郎「角川文庫『浮雲』解説」)

第二篇以後、次第に文三の内言を代弁するようになる語り手が、当初の文三に対する批判的位置を、その文体的特質から失いつつあったということである。

(小森陽一「『浮雲』における物語と文体」)

つまり、「内面直叙」は第二編以降に顕著な性格であって、それをただちに『浮雲』の文章全体の特色と述べることはできないわけである。

本稿は、先に示した「一編四回」の文章からも分かるように、一編～三編の文体がそれほど相違するとは考えない。むしろ「一回～三回」とそれ以降との相違が顕著（それも二・三回は小説の現在進行の中にないわけで独自の性格を持っている）なのだとは思いますが、語り手が「第二篇以後、次第に文三の内言を代弁するようになる」というのもまた、その通りであろう。とすれば、逆に『浮雲』の言文一致体の「由来」をすべて文三の内語に重ね合わせて説明することには、無理があるわけである。

しかしながら、やはり『浮雲』は、本来の地の文すなわちその小説の語り手の領域において内語性をたくらまれた小説であると考えられる。もっとも、小説の語り手の言語に外語性、内語性を云々することにはあまり意味がない。文字通りに「思う通りに書く」ことは、文字通りに「話すとおりに書く」ことと同様、せいぜいが「意識の流れ」程度にしかならないからである（『浮雲』にはその種の試みがなされていることにも注意が必要ではあるが）。しかし、二葉亭の場合は、小説の語り手を内語に擬すべき「理論」があった。「内語＝思考」がそのまま「写実」となるという「理論」があったのである。単に「考えることをそっくりそのまま写せ」ればよかったのかも知れないが、二葉亭は理屈を必要とする人間だった。逍遙の『小説神髓』を批判的に検討する中で、『浮雲』に先立って用意されたと思われる「小説総論」がその「理論」である。

「小説総論」（19年4月「中央学術雑誌」）の解釈・評価は未だ定まったものとはいえないが、以下にまず本稿に関係するその「理論」の核心部分を示す。引用文中の（ ）は原文にあるもの、＜ ＞内は二葉亭訳『美術の本義』の訳語の現代通用の用語である。

人間の善悪を定めんには、我に極美（アイデアル）なかるべからず。小説の是非を評せんには、我に定義なかる可らず。されば今書生気質の批評をせんにも、予め主人の小説本義を御風聴して置かねばならず。……

凡そ形（フォーム）あれば茲に意（アイデア）＜思想＞あり。意は形に依つて見はれ、形は意に依つて存す。物の生存の上よりいはば、意あつての形、形あつての意なれば、孰を重とし、孰を軽ともしがたからん。されど其持前の上よりいはば、意こそ大切なれ。意は内に在ればこそ外に形はれもするなれば、形なくとも尚在りなん。されど形は意なくして片時も存すべきものにあらず。意は己の為に存するものゆゑ、厳敷いはば形の意にはあらで、意の形をいふべきなり。夫の米リンスキー（魯国の批評家）が、世間唯一意匠＜思惟＞ありて存すといはれしも、強ちに出版題にもあるまじと思はる。……豈天下に意なきの事物あらんや。

斯くいへばとて、強ちに実際にある某の事、某の物の中に、其の意全く見はれたりと思ふべからず。某の事物には各々其特有の形状備わりあれば、某の意も之が為に隠蔽せらるゝ所ありて、明白に見はれがたし。……

蓋し人の意は我脳中の人に於て見はるゝものなれど、實際箇々の人に於て全く見はるゝものにあらず。其故如何と尋るに、實際箇々の人に於ては各々自然に備はる特有の形ありて、夫の人の意も之が為に妨げられ、遂に全く見はれ難きによるなり。……

偶然の中に於て自然を穿鑿し、種々の中に於て一致を穿鑿するは、性質の需要とて、人間になくは叶はぬものなり。……

されば意の未だ唱歌に見はれぬ前には、宇宙間の森羅萬象の中にあるには相違なけれど、或は偶然の形に妨げられ、或は他の意と混淆しありて、容易には解るものにあらず。斯程解らぬ無形の意を、只一の感動（インスピレーション）に由つて感得し、之に唱歌といへる形を付して、尋常の人にも容易に感得し得らるゝやうになせしは、是れ美術の功なり。故曰、美術は感情を以て意を穿鑿するものなり。

小説に勸懲、模写の二あれど云々の故に、模写こそ小説の真面目なれ、……主人の美術の定義を拡充して之を小説に及ぼせばとて、同じ事なり。抑々小説は浮世に形はれし種々雑多の現象（形）の中にて其自然の情態（意）を直接に感得するものなれば、その感得を人に伝へんにも直接ならでは叶はず。直接ならんとは、模写ならでは叶はず。されば模写は小説の真面目なること明白なり。……

模写といへることは実相を仮りて虚相を写し出すといふことなり。前にも述し如く、実相界にある諸現象には自然の意なきにあらねど、夫の偶然の形に蔽はれて判然とは解らぬものなり。小説に模写せし現象も、勿論偶然のものに相違なけれど、言葉の言廻し、脚色の模様によりて、此偶然の形の中に明白に自然の意を写し出さんこと、是れ模写小説の目的とする所なり。

一編の小説理論によって小説が書けようはずがないが、実作者としての二葉亭は、小説はかかるものであらねばならないと、自らの理論に鼓舞されたに違いない。その「小説総論」は、ベリンスキーの芸術理論の影響下に執筆され、そして「小説総論」では表面化しないが、ベリンスキーの芸術理論はヘーゲル哲学の下にある。この時期の（ということは二葉亭が「美術の本義」に翻訳したような）ベリンスキーは、ひとまずヘーゲル哲学の祖述者であったのである。

ヘーゲル哲学は「外化」の哲学であると考えることができる<sup>14)</sup>。ヘーゲルの現実（世界、客観）は、外化された精神＝「意匠（＝思惟）＝意（＝イデー＝思想＝主観）」である。「其の持前の上よりいへば、意こそ大切なれ。意は内に在ればこそ外に形はれもするなれば、形なくとも尚在りなん」「米リンスキーが、世間唯一意匠ありて存すといはれしも、強ちに出版題にもあるまじ」とは、本来かかる意味である。よって、まず主観と客観は一致する。あるいは（意識の運動を考慮すれば、その段階に従って）各主観は、己れ相応の客観しか持ち得ないのである。ヘーゲル存在論が認識論と一体化している所以でもある。存在と認識は一挙に与えられる。

二葉亭には「思惟」と「意」（思想）の区別が付いていないとの指摘があるが、この段階では「思惟」と「意」を区別する必要はない。そして、その区別が結局はもたらされないことが、二葉亭の特徴でもある<sup>15)</sup>。また二葉亭が「美術の本義」において、「神の絶対的イデー」を乱暴といへば乱暴に「真理」と訳していることを問題視する向きもあり、確かに「神の絶対的イデー」

は分かりにくかったに違いないが、ヘーゲル哲学は「神」を捨象して換骨奪胎が可能である。あるいは所詮「神＝絶対的イデー」なのだから、「神」は不要とも言える。また「絶対的イデー」は「真理」には違いないから、これを「真理」としてしまうと、ヘーゲル哲学であるという標識は見失われてしまうけれど、それほど見当はずれの結果にもならないのだ。

ところで、主観（的精神）とは思惟の能動面であり、イデーであった。客観（的精神）とは外化された主観であり、外部である。すなわち「美術の本義」の「萬物は氣く精神」の事実となり、以て自ら認識する所以のものなり」「所謂一箇人は萬事萬物を包括し、夫の萬物や社会や歴史や皆其中に在つて存し、世存（世界精神）即萬物、歴史の諸作用も亦其中に於て施さる。曰く何を以て能く然るか。曰く意匠く思惟く存するに由て能く然るなり。嗚呼人は意匠に由て以て外界の諸物、即ち萬物歴史を觀察し、又、其一箇の私を探窮すること猶外界の物に於るが如し」ということにもなる。思惟によってもたらされたこの外部を写すことが、模写である。とすれば、模写もまた、思惟によって与えられる。このため、「模写といへることは実相（＝外部）を仮りて虚相（＝イデー）を写し出すといふことなり」となる。平たく言えば、「これは犬だ。」は幼稚ながらも思惟であろうし、同時に模写なのである。主観でもあり、同時に客観なのである。そこで、意匠（思惟）に於ては、氣（精神）の二現象（主観と客観）が「相合し相和し相類す」。この「所謂二現象とは、一に曰く主氣（内部に属して思考するもの）二に曰く客氣（外部に属して思考するもの）是なり」（「美術の本義」）ということになる。このようにペリンスキーは、思惟・思考という契機を「觀察・探窮」に於いて重視するのであるが、二葉亭もまたこのような「模写」説に於いて、そこに逍遙の『小説神髓』に欠けた所を見出し、大きな共感を覚えたに違いない。逍遙に欠けているのは「精神」であり「思惟」なのであった。

二葉亭は言う、「模写は小説の真面目なること明白なり」。例えば後々の作家に大きな影響を与えた「あひゞき」の自然描写を、自然がまずあってそれを作者が写し出すものと考えてはならない。『浮雲』の模写もそのような性質のものであって、今日ふつうに「対象を写す」が如き「写実」を考えてはならないのである。描写は作者の主観そのものである。主観は「思惟」の言語、内語となって立ち現れる。その内語は口語である。よって描写は口語をもって行われる。よって「あひゞき」の文体は、口語体でなければならない。小説『浮雲』も、それが模写小説、リアリズムの小説であるならば、口語体をもって行われなければならない。以上が、『浮雲』が第一編より、口語体をもって描かれた理由であると考えられる。

「思惟＝内語」は、もちろん二葉亭の「理論」内におけるあるべき姿である。しかしこのような理論があるからこそ、第四回冒頭の「さて其日も漸く暮れるにに間もない五時頃に成っても、……此時日は既に萬家の棟に没しても」以下の如く、語り手の思惟のような（語り手視点のような）、また文三の思惟のような（文三視点のような）地の文章が可能になったとも言える。

とはいうものの、本当にこんなに都合よく小説が書けるものだろうか。描写が主観で構わず「主観＝客観」であるならば、どのような出鱈目な主観によってさえ、立派なリアリズム小説が書けそうなものである。しかし、そうではない。ヘーゲルの「思惟」は、プラトン風の固定的理想型ではない（注13参照）。ヘーゲルの思惟は、それ自身成長する。幼稚な主観には幼稚な客観しか対応しないが、成熟した主観には成熟した客観が対応する。ところが、二葉亭の「意匠＝思惟」には、この成熟・展開・運動の契機が欠けている。「小説総論」のどこを見ても、「意匠＝思

惟」は成長するようには示されていない。「小説総論」では、「世間唯一意匠ありて存す」からの行論はいきなり、「実際にある某の事、某の物の中に、其の意全く見はれたりと思ふべからず」という——この点はたぶん朱子学的発想に由来すると思われる<sup>16)</sup>——「意・形」論になってしまっている。

ヘーゲル哲学をそのまま承認するとしても、実は「思惟」の自己運動はなかなか大変なことがある。それが「理性の王国」に予定調和的にたどり着くとは到底思えないこと、ヘーゲル以降の世界を見てもよく分かる通りである。まして小説のストーリーの展開に於いてをや。ところが二葉亭は、「①小説は浮世に形はれし種々雑多の現象（形）の中にて其自然の情態（意）を直接に感得するものなれば、その感得を人に伝へんにも直接ならでは叶はず。②直接ならんとは、模写ならでは叶はず。されば模写は小説の真面目なること明白なり」と「直接」論を展開し、模写によって「意」が簡単に捉えられるように述べている。もっとも二葉亭自身簡単ではないことも承知していた。そこで「意・形」論とインスピレーション論が必要であったのだろう。

「直接」の論における「直接」とは、本来「無媒介」ということである。種々の展開を経ない「無媒介」の思惟は、意識の最も低次の段階である。だから学識的な認識にあっては、「直接」の意識など否定的にしか取り扱われない。しかし、芸術にあっては感性的・直感的なインスピレーションによる創造が許される。よって「直接」ということが美学的意味を持ち、先の引用の①のような言い方が許されるのだが、それだけのことであって、それは「模写」の真理性を保証するものではない。模写と「直接的認識」は本来別々の事柄である。ところが、②はあまりに直接的であって、「ただ模写すればよい」のように解釈されかねない。あたかも、逍遙の『小説神髓』の写実論（リアリズム）に絡み取られたようなおもむきがあるのである。『書生気質』のような平面描写的小説であるならばそれでもよいかも知れないが、『浮雲』は二葉亭が構成した小説である。そのストーリーの自己展開は、単純な「模写」では済まない。一編の理論で小説が書けるわけがないにしても、二葉亭の場合は「小説理論」が「小説」の創作に先立っていたのだから、二葉亭の「思惟」に「運動・展開・成長」のような発展性があれば、『浮雲』もまた、それ自身成長する物語となる可能性もあったかも知れない。

このようにして、内語としての二葉亭の小説の言文一致体は、思惟の言語であり、内面の言語であったわけであるが、それは『浮雲』の作者にある陥穽をもたらした。模写小説の模写の主体は語り手である。その語り手は、主人公の文三の立場に寄り添っている。この時語り手の語りは、その内語性からしばしば文三の内語（思い）と、作品規模で交錯してしまうのである。それはごく形式的に言えば、文三の内語（心中文）にカッコが付いたり付かなかったりする現象となって現れる。語り手の語りとしての地の文と、心中文の区別が付かなくなってしまうのである。このことは、口語体の小説には現れがちのことであって、例えば『源氏物語』（口語体の小説と考えることができる点に注意）では、地の文と作者の感想が時に交錯するのであるが、それは「物語」の枠組みで守られている限り、ことはその程度で済む。ところが「宇治十帖」のような心理性の強い（そこで近代小説のようにさえ感じられる）部分では、語り手の語り（地）と登場人物の内語がしばしば交錯する。

無論口語体だからと言って、地と心中文が必ずしも交錯しなければならないというものではない。しかし二葉亭は、自ら行う翻訳だけを寄る辺にして、見本がほとんど無いところで日本語の

口語体の小説を書いた。これは困難な事業だったに違いない。『浮雲』が二葉亭の当初の構想を裏切って、しだいに文三とともに追いつめられてゆく過程には、口語体で小説を書くことによる陥穽が待ちかまえていた。では文語体で書けばどうであつたろう。我々はその実例として、森鷗外の『舞姫』を知っている。『舞姫』もまた追いつめられた個人の物語である。しかし、主人公太田豊太郎の思いは、決して赤裸々なものにはならない。文語体が豊太郎の内面を守っているのである。賢明な鷗外は、口語体文章の実践者でありながら、あの『舞姫』を口語体で書く危険を、直感的にはあれ察知していたに違いない。ところが、『浮雲』には当初「構想」があつただけである。二葉亭は口語体とともに文三の思いの場所にたどり着いてしまった。正直者の彼は、以後文三の思いと道行きをともにするほかなかったのである。

## 5. 言文一致体の位置

言文一致体の盛行には波があつた。まず明治10年前後の「開化啓蒙体」「小新聞談話体」の時期。この時期は、いかに広く易しく庶民にものを読ませるか、という意識に主導されていたと言える。その目的に従って、彼らはスタンダードで「話すように」書いたのである。その結果は、読者が「高級化」するにしたがつて「平易さ」を好まなくなるといふ皮肉なものであつた。

第二の高まりは、明治20年前後に認められる。言文一致体は、第一期の壁となつた「趣味の好尚」を突破しなければならない。政治の季節の終焉とともに、人々の知的関心は文学へ向かいつつある。文明進歩の思想は、第一期に引き続いて言文一致の側にあつた。ただ、「言文一致体で」開化啓蒙をもたらしのではなく、「言文一致体そのものが」文明進歩の証となつたのである。文学における覇権は、その象徴となる。ここで華々しく登場したのが、山田美妙であつた。美妙は腕と度胸で言文一致体の代表となる。だから美妙の文体は、第一期の言文一致体の直接の継承者であつた。「美妙宗 この宗には秘蔵のお経あり言文一致と名く」。このように、斎藤緑雨が「小説八宗」(22年)で「言文一致」を云々するのは、美妙についてだけである。

山田美妙の登場は、言文一致の流れの必然であつた。美妙が存在しなくとも、誰かが美妙の代わりをなしたであろう。それは、紅葉でも、嵯峨の屋でも、魯庵でも、誰でもよかったという意味で、美妙の登場は必然だったのである。ただ多くの文学者達は、度胸が乏しかったり、腕が足りなかったり、趣味にうるさかったり、妙に重々しかったり、ちょっと後れて来たりして、美妙の代わりになりそこねたのである。

明治20年代初頭に欧化傾向は、一定の完成を迎えた。完成は退潮の始まりである。美妙の言文一致体はただ第一期を引き継いだけであるから、この退潮に抗することは出来なかつた。彼は明治20年代には、むしろ反感をもたれる存在であつた。反感にはいろいろの理由があつたかも知れない。しかし、彼が度胸一つで言文一致体の代表選手になりおおせたことが、その理由の中に入っていなかつたとは思えない。

二葉亭もまた大きな欧化傾向の流れの中にあつたのは確かであろうが、二葉亭の言文一致には二葉亭独自の必然性があつた。小説の内部に内語を持ち込んだのである。ということは、二葉亭の存在自体には必然性が伴つてはいない。だから、後の時代ならいざ知らず明治20年前後の時代には、二葉亭に取り代わりうる人間は誰もいなかった。彼は傍系の作家であつたのである。

言文一致体の第三の高まりは、明治30年以降多くの作家が言文一致体で書くようになった時期である。もともと言文一致体は、多くの人々にとって、思うことを表現しやすい文体であるから、もはや衰えることはなかった。この時期に思い起こされたのが、二葉亭四迷である。華々しさの記憶が残っているから「美妙、四迷」と並び称されるが、真に振り返られるのは二葉亭だけである。二葉亭の存在は偶然であるから、それだけに重みがある。貴重である。そして彼の文章は、内語の、しかもよく見てみれば高尚な文章であるから、うるさ型を黙らせる力を持っていた。しかし、それは小説の文章としてはゆがんだところがある。それは主人公と語り手の一体化という、口語体がもたらしかねない小説の文章であった。偶然は偶然でも、一旦存在した偶然はもはや力となる。人々が二葉亭を回想する時期に、小説の文章は『浮雲』の文章に捉えられがちになるのであるが、それはもはや本稿の対象外に属する事柄である。

#### 注

- 1) 引用文献のうち、資料的なものは本文中に出典を簡単に示すにとどめた。ただし『近代文体形成資料集成 発生篇』（山本正秀 1978 桜楓社）には、格別の恩恵を受けたことを特記したい。引用は漢字字体を通行のものとし、ルビは適宜示す（示さない場合が多い）。断りなくカタカナを平仮名に直す場合がある。仮名遣いは原文のままとする。その他、読みやすさを考慮して原文を改めた箇所がある。また本文中の「前稿」とは、拙稿「明治スタンダードと言文一致」（2006 『言語・情報・テキスト』東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻）である。前稿と同じ理由で、資料には明治年次を付した。
- 2) 山本正秀『近代文体発生の史的研究』は、言文一致運動の時期区分として、慶応2年から明治16年までを「第1期・発生期」とし、明治17年から明治22年までを「第2期・第一自覚期」としている。そして第1期の後半には「停滞」があった。山本によるこれらの時期の総括を引用しておく。「一方言文一致体の試みも、意外に多く現れているが、これも自由民権思想家や洋学者・小新聞記者たちが、教養の低い下層の民衆を啓蒙しようとした場合に限られ、全面的なまた明確な言文一致の文体革命意識があったかは疑問に思われるものが少なくない。しかも一一、二年頃以後は、言文一致の現象は著しく後退し文語文が全面的に再びはばをきかして来ている。」
- 3) 「主義」という言葉は「主義主張」の方向に偏りすぎるがあるので、本稿では時に「傾向」を用いる。
- 4) 原著者については、山本正秀『近代文体発生の史的研究』の推定に従う。
- 5) 『自序』の原著者については、山本『近代文体発生の史的研究』を参照。
- 6) 林原純生「円朝文芸考」は円朝の「上品な東京語」に注目している。前稿の考えに従えば、「上品な東京語」の語りは近世スタンダードの流れを引くはずである。語りの系譜としては「心学道話」などが考えられる。後考を待ちたい。
- 7) 『日本語の歴史6 新しい国語への歩み』「第二章 西欧文明の波をかぶった日本語」は、言文一致体に関連して、書き言葉の思考性について明晰な認識を示している。しかしその「認識の言語＝書き言葉」「伝達の言語＝話し言葉」という図式には、問題が残る。「内語＝思いの言語」は、果たして書き言葉なのだろうか、話し言葉なのだろうか。書き言葉はふつう確かに思考的であろう。それは「書く」という行為の自然である。しかし、内語を「認識の言語」とすれば、それはあまりにしばしば、支離滅裂になっているのではないだろうか。それ以外の点も含んで、その実態は「話し言葉」的ではないかと思われる。
- 8) 山本正秀『近代文体発生の史的研究』の記述による。
- 9) 歌はパブリックな文学と認められているから、尊敬語や謙譲語も使わないで済む。
- 10) 二葉亭の「東京弁」については、次のような家庭環境も考慮すべきだろう。「二葉亭のお父さんは尾州藩だったが、長い間の江戸詰で、江戸の御家人化してゐた。お母さんも同じ藩の武家生まれ

だったが、矢張江戸で育つて江戸風に仕込まれた。(内田魯庵『思い出す人々』『二葉亭余談』1916)

- 11) ダ止めに代わって頻出するのが、デ止め、体言止めである。「～で」は「東京方言」ではなく「通語」である。恐らく「ダ」の東京方言臭さが、二葉亭に地の文での「ダ」の使用をためらわせたものと思われる。
- 12) ちなみに、『浮雲』では「お勢」という少女の「現象」が、まことに上手に書けている。それに比べるとこの時期の小説の「素人」の少女は、「エリス」を例外としてすべて観念的に造形されていると言ってもよい。サムライ二葉亭はそんな告白はしないが、何か経験をふまえないと、このような浮動性に翻弄される男の様相はなかなか描けるものではなからう。
- 13) 十川も「言文一致体の文章でなければ不可能だった」と、結果論として述べている。
- 14) 「外化(疎外)」については、次の説明が分かりやすい。「ヘーゲルによれば、絶対的理念(絶対精神)はたんにそのものとしては存立し得ず、みずからに存在を与え、自然あるいは社会として自己を外化する(疎外する)ことによって、またその活動を通してはじめて存在し得るものである。」(山崎・市川編『現代哲学事典』1970 足立和浩「疎外」の項)。本稿においては「疎外」に関わる「よそよそしい」という契機は必要ない。
- 15) 「ベリンスキーの考える「イデー」が、時間とともに「前進し発展する」きわめて動態的なものであるのに対し、長谷川の考える「意」は、だいたい、「形」の中に「在る」だけの静態的なものです。」(北岡誠司『小説総論』材源考)との指摘がある。つまり二葉亭の「意」には運動の契機が全く欠けている。だからベリンスキーをよく理解できていないとは言えるのであるが、それによって「小説総論」に何か具合の悪いことが生じるわけではない。「小説総論」は、そういったものなのである。
- 16) 「小説総論」と「美術の本義」の用語に関して、ヘーゲル―ベリンスキー的概念と朱子学的概念が混乱しているのではないかという問題がある。

まず、二葉亭がヘーゲル―ベリンスキー的概念を朱子学の用語「理・気」をもって訳していることが二葉亭の「誤訳」か否かについて述べる。朱子学的な理気二元論は、もともと「理」を「精神・イデー」に、「気」を「現実・世界」に対応させたいところがある。当時としては、ヘーゲル哲学を「理・気」に翻訳することは自然であり、用語からはそれが混乱か正解であるかは、なかなか分らない。

「神の絶対的イデー」を「真理」と置き換えることが可能であることは、本文で述べた。また二葉亭はロシア語のduxを「気」と訳すのであるが、duxは英語のスピリットに当たる語のようである。漢語の「気」とスピリットは、ともに「息」と関わるところからして、よく似ているところがある。また「気」もスピリットも、精神とも物質とも解することが出来る。「気」は天地に充滿しているが、人間にあっては靈性を介して精神に結びつく。スピリットもまた同様。二葉亭が「主観(的精神)」と「客観(的精神)」を「主気(思考するもの)」「客気(思考されるもの)」と訳すのは、「気」の二面性によく対応している。そして「主気=客気」はその二面を併せて「思想」そのものである。duxを「気」と訳すのは適切であると言える。つまり用語としては「理・気」が使われているけれど、二葉亭が大きな誤解をしているわけではないように思われる。しかしこの時期の読者の立場からすれば、これを朱子学的な理気二元論の枠組みで解釈してしまう恐れも、十分にあった。

朱子学にあっては、「理」は整然たる存在原理であり、「イデー」である。「気」はその現実的な対応者である。現実的であるから清濁が生じたり過分であったり不十分であったりして(中庸にあらずして)、ゆがみが生じることがある。価値的(倫理的)な意味でも事実的な意味でもゆがんでいることがある。「意」はほぼ「理」に対応し、「形」は「気」に対応する。「形」には特有の(朱子学的)「気」が発現してしまうことがある。「実際にある某のものごと」の中に「某の意全く見はれたりと思ふべからず」。「張三」も「李四」も同じ「人」であっても、氣質が異なるのである。つまり二葉亭は「意・形」論のところで、「理・気」という用語を使っているとはいえないのであるが、朱子学的「理・気」論を「本然の性」「氣質の性」に対応させて展開している。もちろん「小説総



論」の「本然の性」「氣質の性」は、倫理的な意味ではなく事実的な意味での「本然・氣質」である。この「理・形」論が、「小説総論」の最も朱子学的なところであるように思われる。

現実界においては「意」は「偶然の形」に妨げられている。これを感じ得するには、スピリット（息）をin (into) してやる必要がある。インスピレーションが必要である。小説は美術（芸術）であるから、感情をもって「感動を喚起し」、「意」を追求するものである。これは学的媒介を経ずに（「直接に」）行われるものである。そのためには「勸善懲惡」の余計な説教は不必要である。邪魔である。ただただ「模写」するのがよい。とは云うものの、小説は「実相（現実界の「形」）を借りて虚相（「意」）を写し出す」ものである。ところが「形」は既にしてゆがんでいる。模写と云っても、それなりの工夫（「言葉の言廻し、脚色の模様」）が必要である。以上のように二葉亭は考えているようなのである。

小説論として、この最後の部分が弱いのは明らかである。その論理的な誘因は、「形」が「意」を直接に反映しないという認識、「理気二元論」にある。その理気二元論は、「我が感ずる所を以て之をものに負はすれば、豈天下に意なきの事物あらんや」という「思惟即現実」論の後に続いている。二葉亭は「思惟即現実」論で言文一致体に進もうとしたが、それだけでは不十分との認識にも達していたのである。

なお、北岡「材源考」では「スツルーヴェ・論理階梯」にある「事物の特徴には、本質的あるいは必然的特徴と非本質的あるいは偶然的特徴とがある」という考え方が「意・形」論に「寄与したのではないか」との指摘がある。もっともであり、二葉亭もこの考えに我が意を得た思いを持ったであろう。だがスツルーヴェの「本質・偶然」の論は、（偶然の）「特有の形状」がイデーの完全なあらわれを「妨げ・隠蔽」までするとは述べない。とすれば、「気が理の十全の発現を妨げる（ことがある）」とする朱子学的発想に、「スツルーヴェ」は重ね合わされたということなのではなかろうか。

## 文献

直接に引用した参考文献については次の通りである。初出・再録が混淆している。

- 中村 光夫 『日本の近代小説』1954 『明治文学史』1959 『中村光夫全集11』による。  
伊 藤 整 『日本文壇史2』1954  
稲 垣 達 郎 角川文庫『浮雲』解説 1958  
北 岡 誠 司 『『小説総論』材源考』1965 『国語と国文学』9月号・『日本文学研究資料叢書 坪内逍遙・二葉亭四迷』による。  
山 本 正 秀 「近代言文一致体の文末辞法の語史的考察」1971 『言文一致の歴史論考』による。  
読売新聞社 『読売新聞百年史』1976  
林 原 純 生 「円朝文芸考」1984 『日本文学研究資料叢書新集 近代文学の成立』による。  
小 森 陽 一 『『浮雲』における物語と文体』1985 『成城国文学論集』『文体としての物語』による。  
十 川 信 介 『『浮雲』のことば』2004 『明治文学 ことばの位相』による。  
遠 藤 好 英 「ダ体の文章の系譜」2004 『言文一致運動』所収